
無限航路冒険録

ASTRAY GF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限航路冒険録

【Nコード】

N3887L

【作者名】

ASTRAY GF

【あらすじ】

死んだと思ったら、神様達に転生+憑依をさせられてしまった！
！行った先は「無限なる航路」の世界。しかも微妙に他の作品もク
ロスしている！？どうなるの俺！？

「・・・まあ、なににせよ行ってみますか。この星の海を！！！」

プロローグ1

side:???

・・・いきなりだが、俺は死んだ。

うん、いきなりこんなこと言っても分からないだろうけど、とにかく死んだ。原因を一言で言えば病死である。

生まれつき体が弱くて何回も入院と退院を繰り返していたが今回で限界だったようだ。

ん？じゃあなんで死んでるのに話しているかって？それは・・・

ここがああ世だからだ

いや、冗談でもなんでもなくてほんとにあの世。しかも俺みたいな人もいれば動物もいるし、最初は目を疑ったが、あきらかにゲームや小説、漫画にでるようなモンスターや、翼の生えた人なんかもいる。どうやら、あの世っていうのはどうやら俺のいた世界だけでなく、あらゆる世界の死後に行き着く場所のようだ。

ちなみに、自分は今ああ有名な閻魔の所にいる。ああ現世での罪を調べるやつだ。

もうすぐ自分の出番である。はあ、せめてもうちょっと楽しく生きてから死にたかったなあ。なんせ、さつきも行ったように入院と退院を繰り返していたから、友達なんかも一人もいなかったため、唯一の楽しみはアニメや小説だったからな・・・

閻魔「はい、次の人〜」

・・・どうやら自分の番のようである。はあ、せめて天国に行けたら良いな・・・

side: 閻魔

「はい、次の人～～」

ふう、やれやれ最近はやたらあの世に来るやつの頻度が上がって忙しくてかなわんわい。ついこの間もめんどくさいだけだった”あんなこと”があっただけに休暇の一日や二日でもほしいわい・・・

????「・・・あの～、まだですか？」

おっと、いかん、いかん。えーとこやつはと・・・ん？んん？！
おお！！！！

「おお！！やつと来おったか！！！！・・・っとうしてはおれん。
”あいつ”をやく呼びに行かんと！おぬしはちよっと待っておれ
！ おい！！！！」

わしの一声で数人の鬼達が出てくる。

「こやつを”あの部屋”につれていっておいてくれ。乱暴をしては
ならんぞ。」

「承知。」

????「え？あ、あの、展開に追いつけないんですけど・・・って

！あああ～～～～・・・」

なんかあやつが言っておったが、わしには関係ない!!これであつとチェックする項目が1つ減るわい。(泣き笑)わしにとつては1つ減るだけでもありがたいわい。

・・・余談であるが、閻魔のチェックの際の項目はざっと三桁以上ある・・・

side:???

鬼「ここで待っていてくれ。なに、地獄に落とすわけじゃないから。んじゃ。」

バタン・・・

・・・何が起こっているのか自分でもさっぱりである。閻魔の捌きで地獄か天国行きかを決めるはずだったのに、いきなり閻魔の爺さんが大声を出したと思ったら、言葉通り「あつ」と言うまになんか分からん部屋に運ばれてしまった。

・・・まあ、地獄行きではないこともさっきの鬼さんのおかげで分かったからいいけど、どうすればいいんだ?閻魔の爺さんはまっぴら言つて言つていたk「またせたね」・・・待っていねー。つかタ イミングいいなオイ。

???「いやーやつと見つかつてくれたよ”憑依”に耐え切る事ができる人の魂が。」

!!!いま、この人(?)何て言いました?!?!憑依!?!いや、それよりも!!

「あ、あの説明していただけるとありがたいのですが。もう何がな
んだかわからないんですけど!」

「???」あれ?閻魔の爺さん、なんもいって無いの?・・・まあい
いか、とりあえず自己紹介をしておこうか、俺は『ルシフェル』、
まあよろしく。」

・・・とんでもない大物が出てきちゃいました。

プロローグ1（後書き）

ども、ASTRAY GFといます！

この作品はQOLさんの無限航路に即発されて作ってみました！！

まだプロローグで短いですが、これから頑張っていくのでよろしく
お願いします！！

ちなみに、自分はハッピーエンド主義です。

プロローグ2（前書き）

後半、どうぞ！

プロローグ2

side:?????

「紹介も終えたことだし、説明に入っていこうか。」

やっと説明である。あの後、あまりにも大物の人(?)が来てしまった為しばらく啞然となってしまうた。とりあえず、状況を聞くとしよう。

ルシフェル:「しばらく前なんだけど、このあの世に、と言っても実際は俺達『神』『悪魔』『精霊』などの君達に比べると高位な存在達の住処みたいなものなだけだ。あ、ついでに言うところんな世界の『死後』の管理もしている。・・・ごほん、話がそれた。とにかくこのあの世に、俺達の管理外の世界のやつらがきやがってな。そいつらは「すべての世界は我々が管理するべきだ」とぬかしやがってな、戦争しかけてきやがったんだよ。」

なんか、いきなり戦争ですか？

????「それで、かなりの被害が？」

「いや、ぜんぜん。」

へっ？

「あいつらな、自分達の世界では確かに最強だったんらしいけど、俺達と比べたら遙かに弱くてな、特に苦勞もしないで殲滅しちゃったよ。」

・・・さ、さすが神々。追い払ったんじゃない、殲滅ですか・・・

「問題はその後でな。」

ん？

「あいつらの世界な、襲ってきたあいつら自身が作りだした世界でな、管理するやつが居なくなつて一度崩壊してしまつたんだよ。その世界に居るやつ自身にはなんの罪も無いわけだから作り直した訳なんだよ。」

もはやここまでくるとなんでもありだな。ん？まてよ。

???。「じゃあ、俺がここに呼ばれた意味は？」

「それはな、実はこの世界はある一点を除いて完成していてな。その最後のピースがお前な訳よ。」

???。どういふことじゃ???。

「さっき言った襲ってきたやつらなんだけど、その自分達の世界を監視するためにある意味では人造人間に近いものを作つただけだ。・ 体は完成したけど、中身を設定する前に俺達に殲滅されたから中身が空っぽでな。おまえにわかりやすく言うとパソコンのボディはあるけど中のデータが全く無い状態でな。」

なるほど、それは分かりやすい。

「あいつらが完全オリジナルで作つたから、俺達でも手の施しようが無くてな。そこで最後の手段として死後の魂をこの体にいれて完成させようということになつてな。そこで白羽の矢がたったのがお

「だから。」

「そうか。ならいくぞ。」

え？ちょっとなんで指をこっちにつて、めり込んでる！めり込んで
いる！どごごの北斗七星のごとくつて、あ、ああ頭が、ああああ
あああああああああ~~~~~

「終わったぞ。」

・・・死、死ぬかと思った（もう死んでるけど）

「では、そろそろ言ってもらつて。お前達の世界では「無限航路」と呼ばれた世界に。」

へ？今何て言った？！？！？！

「じゃ、行ってこーい！」

つて、真下にいきなり穴が！！これはテンプレってやつかって！

?????」どわ~~~~~
.....

「ああ、言い忘れたけど世界の修正の際にどうしても足らなかった部分を、お前の言う他の漫画や小説なんかで補修しているから、元

の世界とは色々違うと思うからな〜」

って、ちょー!?

????:「マジツすか――――」

おれの意識を取り戻したのはすでについた後だった。

そう「無限なる航路」の世界に・・・

プロローグ2（後書き）

次回から本編スタート!!

初心者ですが、完結目指してがんばります!!

ロウス編 1 (前書き)

本編どうぞ!!

ロウズ編 1

side:ユーリ

ども、「?????」改めて「ユーリ」です（やっと名前が言えた。と言ってもこの世界での名前だけ）。この世界で生を受けてもう16年が立った。

あのときの説明では分からなかったが行く世界が分かってしまえば芋づる式にすべてが分かっていた。

まず、ルシフェルの言っていた「襲ってきたやつら」についてはこの世界において上位宇宙に存在する高次元の知的生命体。「オーバード」であることがわかる。何らかの目的を持って、今俺のいる下位宇宙の創造と破壊を繰り返していたらしいけど、神々の世界に喧嘩売ったもんだから今では跡形も無く、今では、この世界はあの世の管理下の一つになったようだ。もちろん死後のみだけ。結局あいつらは何がしたかったんだろう？

次に「人造人間っぽいもの」についてはおれの体に間違い無い。元々この体の「ユーリ」は、オーバードと呼ばれる自らが造り出した宇宙を観測しているいわば神さま的な存在に造られた“観測者”と呼ばれる人間であった。オーバードが造り出した宇宙を巡って文字通り“観測”させる為だけに造られた人間である。しかし、今ではその大元がいなくなっているの俺の魂が入り込んで完全に容姿以外は違う存在となり、もちろんコントロールなんかも受け付けるわけが無い。

と、まあ完全に原作とは違って自由な存在になれたようである。

・・・だけど、現在までで一番違いに驚いたことと言えば、

????「ユーリ、もうすぐ『打ち上げ屋』さんとの待ち合わせの時間よ」

「ああ、分かってるよ「チエルシー」今行くって」

そう、原作ではオーバーロードによって作られて、宇宙に行つてから合流するはずの妹のチエルシーがすでにそばにいて、今は現在進行形で一緒に宇宙に行こうとしている。

原作のチエルシーは“観測者”の対となる“追跡者”と呼ばれる存在である。”観測者”と同じくオーバーロードが存在を確定させた人間であり、その行動目的は“観測者”と行動を共にし、確定した情報をオーバーロードに送るのが目的であったのだが、さっきも言ったとおりユーリと同じく完全に独立している。

ちなみにこの世界のチエルシーは実は義妹であり両親が生きていたとき（現在、両親はすでに他界（病死））に引き取られて一緒に暮らしている。

だけど時々、血が繋がってないことを知っているのでLIKEではなくLOVEで迫ってくるのがあつて、時々困る（汗）。

さてと、話は変わるが、今俺たちはロウズの辺境で連絡を取った『打ち上げ屋』の人と待ち合わせをしている。『打ち上げ屋』とは、その名の通り宇宙へ行きたい人々を宇宙船で打ち上げる、言ってみれば「人専門の宇宙への運び屋」である。本来ならばこんな手間をかけなくてもいいのだが、今いるこの星「ロウズ」では、航宙禁止法をといたものが定められていて、領民の宇宙進出を禁じているのが原因である。そのために『打ち上げ屋』に依頼をしたのである。

・・・だが、

「来ないね。ユーリ」

「おかしいな、時間、場所どちらもあっているはずなんだけど？
なんかあったか？」

約束の時間になっても待つてくれているどころか、来る気配さえ
ないのである。流石に16年も立ってしまっ原作を思い出すのも一
苦勞だし、何よりもチエルシーの例があるように、原作とはもう別
のものになってしまっ可能性が高いので当てにすることもでき
ない。

どうしたものかと悩んでいたら・・・

「あれ？向こうに方に見える、光っているのは・・・なに・・・？」

side：チエルシー

今日はついに兄のユーリと一緒に宇宙に出る日。最初はあまり乗
り気じゃなかったけど、ユーリにいろんな話を聞いていくうちに自
分から行きたくなっしまっ。違っ星の文化や、宇宙にある様々
な銀河、そしてまだ見ぬ新たな航路。いつしか自分からユーリの手
伝いをして宇宙へのたびの準備をしている。

それに、今ではユーリとは血は繋がってないけど私の唯一の家族
最初は孤兒だった私に家族をくれた家族の一人。もう両親はいない
けどユーリとは最期まで一緒にいようと決めた。

だから、ゆっくり休んでいてください。それじゃ「お父さん」「
お母さん」行ってきます。

そうして待ち合わせの場所に来てみたまでは良かったのだが、肝
心の『打ち上げ屋』さんが姿を現さないため、途方にくれていたら。

「あれ？向こうに方に見える、光っているのは・・・なに・・・？」

「ん？あれは・・・戦闘！？まさかロウズの守備隊に見つかったのか！？」

それならば、時間になってもいない理由がつく。だけど、そうすると宇宙に行く計画はどうなるんだろうと考えていたら、

ドガン！ ジ、ジジ、ジジジ・・・

「不味い！左翼に直撃した！！・・・！こっちに落ちてくる！チェルシー！走って！！」

そう言われて必死に逃げたおかげで、私達兄妹は何とか逃げのびて巻き添えにならずにすんだんだけど、『打ち上げ屋』さんの船は森の中に落ちてしまった。

不幸中の幸いか、守備隊の艦隊も、もう十分だと思ったのか撤収して行った。『打ち上げ屋』さん、無事ならいいんだけど・・・

side：トスカ

「ついてないね〜〜〜はあ」

アタシの名前はトスカ。仕事は『打ち上げ屋』をやっている。今回も仕事で「ロウズ」に来たのはいいんだけど、へまやってしまった。ロウズの艦隊に見つかって、いくらおんぼろ中古艦艇とはいえ、何隻もの集中攻撃をくらってしまえばそりゃ一発や二発は当たるけど、今回はよりによって左翼にあったインフラトン・インデュース・インヴァイター（簡単に言えば機関部）に直撃して墜落とは、こりゃ依頼主に申し訳が立たないね・・・

がさ、がささ・・・

「ん？ちっ、ロウズの搜索、いや追撃部隊か？」

いつでも反撃できるように腰のレーザーブラスターに手を伸ばすが・・・今回は使わずにすみそうだ。なぜなら、

「「あ、あの大丈夫ですか？」」

今回の依頼主のようだからだ。

side：ユーリ

うわー、もろ左翼の内部が露出している上にショートしているけど直るのかコレ？とりあえずは、

「依頼したユーリとチエルシーです。今回、宇宙そふに打ち上げて貰うために来てもらったのですが・・・大丈夫ですか？」

損傷した機体の横で焚き火をして暖を取っていた女性はこちらに向くと、

「ああ、体のほうは問題ないけど、機体の方が重症だね。何とか修理しないと宇宙そふどころか、飛ぶことさえままならないよ。おっと、自己紹介がまだだったね。アタシはトスカだ。よろしく頼む」

「あつ、私はチエルシーです。よろしくお願いします（ぺこ）」

とりあえず挨拶も終わったところで今後について話していく。

「トスカさん、俺はドッグで働いていましたから損傷にもよりますけど応急修理ぐらいならできます」

「本当かい！そりゃ助かるよ。よし、もしうまくいって飛べたら今回の料金は半額にするよ！！」

おお！トスカさん太っ腹！ま、とりあえずは、

「じゃあ、ちょっと見てみますから二人は誰か来ないように見回りをお願いします。もしロウズ守備隊に見つかったら厄介ですから」

「「分かった（わ）」」

さてと、作業開始！！

.....

うーん、見た目よりかは大丈夫だったようで、これならば外装はともかくとして、ショートした部分を修理さえすれば、なんとか飛べるだろう。さいわいインフラトン機関もそれほど損傷を受けていないし、どうやら墜落の原因はバランスの損傷のほうがかかったようだ。バランスならばインフラトン機関に比べれば苦勞は無いので予想よりも早く直りそうである。

「子坊、どうだい？修理のほうは？」

「ユーリ、直りそう？」

「お、トスカさん、チェルシーもお帰り。修理のほうだけけど見た目よりも損傷は軽いみたいだから。バランサーがいかれているけどこれなら修理できるよ。流星に外装はどうにもなりませんけど。あと、トスカさん、俺には「ユーリ」って名前があるんですけど・・・」
「そついうのは一人前の船乗りになってから言うもんだよ。けど助かったよ。墜落したときはどうなることかと思ったからね」

そんなこんなで修理は進み

・
・
・
・
・

よし、修理完了!!

「トスカさん、いつでもどうぞ!!」

「あいよ!んじゃ、すっかり?まっときなよ!!」

その言葉を合図にトスカさんの機体は一気に加速していき、雲を、大気圏を、そして成層圏もぬけて俺の、いや俺たち兄妹の憧れだった宇宙へと、星の海へと飛んでいった。

「さて、行くとしますか、この「星の海」に、そして「無限なる航

路「に…」

ロウズ編 1 (後書き)

こんな作品だけど、お気に入り登録してくれた人がいた・・・

どうも！ありがとうございます！！

これからもがんばっていきます！！！！

それでは

ロウズ編 2

side:チエルシー

今私は、宇宙に来ている。そう、初めての宇宙に。いままで見上げないと見ることができなかった星が、今ならどっちを向いても見ることが出来る。最初あった不安は、いつの間にかどこかに行ってしまったようだ。ユーリと一緒に行くこと誘うのも納得した。そういうえば誰かが言ったっけ“宇宙には無限の可能性がある”まさにその通りだと思った。

「けっこう無茶な大気圏突破だったけど、意外に二人ともやるね。並みの素人なら気絶していてもおかしくなかったんだけど・・・それよりもどうだい？あんだ達が見たがっていた「星の海」の感想は？」

私は今、コックピットから見える「星の海」に目を奪われてまともに返事をすることもできない。横目で見ると、どうやらユーリも同じようである。くすっ、普段はどこか大人びた感じがするけど、こういうときは一転して子供っぽいんだからユーリは。

「ん？怖くなつちまって声も出ないのかい？」

「いや違いますよ。その逆で俄然興味がわいてきましたよ!!」

「私も同じです！やっぱり聞いたものよりもずっときれいです！」

私は掛け値無しにそう思った。数多の星々が光り輝いて、まるで一種の芸術となっている様に見えたからだ。

「ははっ、ほんと大物になりそうだね、あんだ達は。普通のやつな

らまず「怖い」って感情がどうしても出てきちゃうのに、あんだ達はそれよりも先に「興味」がわくとはね。・・・けど“宇宙は怖いところ”ってことも覚えてきなよ。宇宙じゃ簡単に死んでしまうんだから。わたったかい？」

「「はい！！」」

ユーリについてきてホント良かった

side:ユーリ

「さて、これからはどうするんだい？確かエルメツツア本国に行きたいという話だったけど」

「ええ、お願いします。エルメツツアは大国で星々はロウズよりもずっと発展していると聞いていますから、そこで船を作ろうと思ひまして。」

大国ならば、この“設計図”を“実物”にすることもできるだろうし。

「なるほど、そこで働いて自分の船を持つってわけかい？」

「いや、実はお金についてはあてがあるんで、昔から作っていた“オリジナル艦艇”を実際に作ってみようかと」

「！！自分で船を設計したって言うのかい！？大丈夫なのかい、その設計図？」

つむ、失礼な。

「なめてもらっちゃ困ります！この数年間、設計を繰り返して、い

くつもの失敗作を出しつつも、ついこの間完成したこの設計図。そんなじよそこらの船とはレベルが違いますよ!!」

「ああ、だからユーリこの間、自分の部屋で小躍りしていたんだ・
」

って、チエルシーにあの時の見られていたの!? うわ、恥ずかしい、orz・・・

だけど、だてに神様からもらった知恵じゃないぜ!! 最初のころは知識だけはあってもその他の色々な問題で、廃棄になった案の数はもう数え切れないが・・・

「ほう、言うじゃないかい。でもそれならわざわざ本国までも行かなくてもトトラスまで行けば、造船工場があるからそこで作ればいいんじゃないかい?」

「えっ、でも予想以上に船体が大きくなってこの辺のじゃ作れないと思うんですけど?」

「ああ、そういう問題なら大丈夫だよ。空間通商管理局には必ず大型艦用のドックも数は少ないけどあるからね。造船工場では入りきらない艦を作る場合はそつちで作り上げられるんだよ。ま、その場合は例外として余計に金がかかるけどね。一つ丸々予約を長期で取ることになるから」

おお、ラッキー!! これならば予想よりも早く“これ”作ることができそうだ。

ちなみに空間通商管理局とは、宇宙港に必ずあり、あらゆる政府、星間国家から独立した存在であり、宇宙の航路、ワープゲートの管理をしているほか、その惑星に降りるための施設もあるため言わば“惑星・航路の窓口”と言える施設なのである。発着用のドックもここにある。

「とりあえずはバツシヨに向かうよ。直したとはいえ、所詮は応急修理だからね。一度ドッグに入らないと。それに今回の打ち上げの料金もまだだったしね」

そうして俺たちをのせたトスカさんの「デイジーリップ号」は特に戦闘も無く、無事にバツシヨについた。

惑星バツシヨ：酒場

side：トスカ

「さてと、それじゃあまずは打ち上げ成功の料金をもらおうとするか、修理してくれたから約束どおり半額の一人500G、二人で1000Gをもらおうよ」

「あ、はい。えーと・・・あつたこれです
「私のは、これです」

あいよ、んじゃこの渡されたカードを端末に差し込んでつと・・・うん、確かにそれぞれ1000Gちょいづつ入っているな。半額だからそれぞれから500Gとりだしてつと。

「あいよ、確認したよ。これであんた達二人も、晴れて『0Gドッグ』の仲間入りさ」

ちなみに説明をすると、『0Gドッグ』とは宇宙航海者の俗称である。「航宙法」とは別に独特の「アンリトゥンルール」を持ち、それを破る者は唾棄すべき存在として軽蔑の対象となる。

アンリトゥンルールの最も有名な物は、戦いは宇宙で決着をつけ、

地上の民間人を巻き込まないというもので、この思想は戦争においてすら援用される。

簡単に言うところなところである。

さて、話は戻って、

「さて、さつきあんた達は「金に当てがある」と言っていたけど、船を買うんだよ。並な金額じゃすまないよ。」

これが、アタシが気になっていることだ。この辺で買える設計図と言えばトトラスで売っている輸送艦を改造して作った駆逐艦クラスの「ジユノー級」や「アルク級」だが。それでも、その船自体を作ろうとしたら10000G近くの金が必要となる。まして、オリジナルの戦艦を作ろうと言うのだ。このまだ少年、少女をまだ出たばかりの様な子にどこにそんな金があると言うのだろうか?・・・宝くじでも当たったか?まさかなこんな辺境でやってるとも思えないし。

「・・・絶対に大声を出さないでくださいね。実は親父が残してくれて、「困ったら売れ」と渡されたものがあるんです。親父も昔はOGドッグだったらしくて、そのときに見つけたものだ」と

? 一体なんだそれと思って、だされた物体を見る。形は正方形、その全体が赤のラインで装飾されている物体。あれ?これってどこかで見たとような・・・・・・って、あ!!!

「え?ちよ、これって、エ、エ、エピタフ!?!?!?!?!?」

side:ユーリ

「それにしてもいいのかい？話からするにそれって今では親父さん達の形見なんだろ。そんなに簡単に売っちまっつていいのかい？」

「それなら問題ないですよ。別に名誉とかが欲しいんじゃないんで、ただこの世界を見てまわってみただけですから。それに他に形見といえるものがありますから。俺のほうは、親父が現役時代に使っていた『スークリフ・ダガー』がありますし……」

「私も母が使っていた『メーカーブラスター』がありますから、形見に関しては大丈夫です」

「……あんたらの両親は両方ともOGドッグだったってわけかい、筋金入りだね……両方ともよく使われたあとがあるよ……」

そんなわけで今後のこともかねて色々相談をしていたのだが・

????「おい！」

「「「？」」」」

いつの間にか、明らかに不良です。と言った集団に囲まれてしまった。

????「なんだか知らねえが、そいつはスゲエお宝みたいじゃねーか。そいつをこの「トーロ」様に渡してもらおうか」

「ん？買ってくれるなら問題なく渡すけど？最低10万Gだけど？」

「そんな大金わざわざ用意すると思ってるのか？無理やり奪っつまえばタダで手に入るじゃないか」

ま、そうなるよな。

「お！喧嘩か、喧嘩か？やっちまえよ子坊」

「・・・絶対に観戦して楽しむ気ですなトスカさん・・・チエルシーは下がっていて、俺が相手するから」
「・・・うん、怪我しないでね」

うーん、やっぱり家族がいるっていいね。

「なに、ごちゃごちゃ言ってるやがる（怒）オラァー！ー」

甘いんだよ。ていうかわざわざ声だすなよタイミング教えているよ
うなものじゃないか。

パキーン！・・・キン、キキン、キン（ナイフが折れて落ちる音）

「げっ！！俺のナイフが一発で折れた！？これまだ新品なのにつて、
『スークリフ・ブレード』！？い、いや、それにしても短いような・・・」

「短剣タイプの『スークリフ・ダガー』だ。ブレードに比べて小回りが聞くから扱いやすさじゃこつちが上だ。さてと、まだやるか？」

「く、くそ・・・ケチャック！回り込んで押さえk「バシユ！！」
ひっ！！」

「動かないで、つぎは当てるわよ」
「チエルシー、ナイス」

後ろに回り込もうとしたやつがいたようだけど、チエルシーの牽制射撃で動けなくなったようだ。

「く、くそ、みんな引け！！」

バタバタバタバタバタ・・・

・・・逃げるの早いなオイ。

「いやー儲かった、儲かった。子坊、おかげでボロ儲けだよ」

「・・・儲かったって、人を勝手に賭けの対象にしないでくださいよ・・・」

「そうですよトスカさん。ひどいです」

「はは、まあ無事なんだからいいじゃないか。それにあんた達気に入ったよ！よし、儲けさせてくれたお礼にプレゼントをやるつもりじゃないか？」

「「?????」」

デージーリップ：中

side：ユーリ

「「これって・・・」」

「チエルシーのほうはアタシのお古だけど、空間服さ。衝撃吸収能力はその辺の服とは比べもんにならないよ」

「「ありがとうございます!!!」」

「それに、ユーリにはスークリフ・ブレードのおまけ付だよ」

「い、いいんですか!?これ、かなりの値打ち物だと思いますけど!!!」

「いいんだよ、アタシはあまり剣は使わないし、ダガータイプだけだと何かときついだろ?それにさっき言ったとおり儲けさせてもらったお礼なんだから」

おお、やっぱりトスカさん太っ腹だよ。いくら感謝しても足らん。

「さてと、船の修理も済んだことだし最初の目的地である『トトラス』に向けて出発しようとするかい？」

「はい！」

そうやって、途中にある惑星「ベゼル」で一度補給を受けて「トトラス」に向かったのだが・・・

惑星トトラス：付近の宙域

ヴイーーーー、ヴイーーーー、ヴイーーーー

「ちっ、見つかったか！ユーリ！チエルシー！後ろの部屋が射撃管制室になってるから迎撃してくれ！！避けるのはまかせろ！！！」

「は、はい！！！」

「わ、分かりました！！！」

どうやら、ロウズのパトロール艦隊に見つかってしまったようだ。

「チエルシー！！俺はミサイルの照準をするから、チエルシーはレーザーで！！！」

「分かったわ！！！」

トスカさんの船「デイジーリップ号」は艦艇としては、かなりの小型艦で、一対の羽があるような形をしており、その両翼にそれぞれミサイル発射管とレーザー砲を装備している。

「幸い、敵艦は二隻だけだ！チエルシー！左の艦から沈めるよ！！！」

「うん!!」

チエルシーと目標の確認をした後、俺は照準器に目を移す。相手も小型艦だから、艦隊戦というよりは艦載機戦のほうが近い感覚だ。この間も敵艦は撃ってくる。もちろんトスカさんはそれを避けるので機体が揺れるためなかなか敵艦をロックすることができないが、

「ユーリ!!」

「今だ!発射!!」

バシユン!ドシユン!

ミサイルとレーザーが敵艦に向かって飛んでいく。少し間を挟んで遠くで大きな目の光が確認できた。

「敵艦、インフラトン反応拡散、撃沈に成功!!よくやったよ、二人とも!!」

「まだ一隻残ってますよ!チエルシー!!」

「大丈夫、いつでも撃てるわ!!」

こうやってもう一隻も迎撃に成功して無事に俺たちは「トトラス」にたどり着くことができた。

「ふう、なんとか迎撃に成功しましたねトスカさん」

「ああ、これが惑星「ロウズ」を出た直後だったら流石にやばかったね」

「不幸中の幸いでしたね」

まあ、なににせよココについたからには、

「さてと、作るとしますか！俺たちの船を！！行くよチエルシー」
「うん……！」

ロウズ編 2 (後書き)

今回でてきた武装の紹介

・スークリフブレード、ダガー

高位のOGドッグ達によって愛用されている宇宙刀。

臨界点以上に加圧・加熱し、超臨界流体 (Super Critical Fluid) にした金属で刀身に被膜を作ることにより、あらゆる物質が超臨界流体によって融解・切断される。

・メーザーブラスター

マイクロ波を用いた銃器。水分子の動きを活発化させる。照射された箇所は水分子の加熱により、部分的に焼き切れてしまう。

次もがんばって書きます!!

感想待っております!それでは!

5/12 スークリフ・ナイフをスークリフ・ダガーに変更しました。

ロウズ編 3

Side:チエルシー

「んじゃ、俺はエピタフを売ってくる交渉に行つて、その足で艦艇工場に行つて船を作っているから。チエルシーはその間に俺たちの船に乗ってくれる人を集めに行つてもらつていいかな」

今私達は、トトラスの酒場でこれから何をするかを相談している。ユーリは今言ったように艦を作るための軍資金を作りに行つて、そのまま艦の建造に入るつもりらしい。だけど、ユーリやり過ぎないといいけど、交渉……。前に何回かあったけど、買い物任せたら、値段の半額以下にまで値切つて来たからな……。でも、これからはお金は前以上に大切になるからユーリには頑張ってもらおう！
うん！

私も、私達の艦に乗ってくれる人を探さないと！！

えっ？トスカさん？トスカさんなら宇宙で必要となつてくる生活用品や食料、弾薬の調達に行つたよ。それに私達の船に乗ってくれるんだって！！本人曰く、

「アンタらと一緒になら、退屈の二文字だけはなさそうだからね」

とのこと。それじゃ、私も頑張ろう！

.....

・
・
・
「と、意気込んだのはいいんだけど、どうしよう(汗)・・・」

その後、みんなと分かれてそれぞれの担当の仕事に行ったのはいんだけど・・・このあたりの領域って、領主の「テラコンダ」の定めた「宇宙禁止法」のおかげで、みんな閉鎖的で全然話を聞いてくれそうにない・・・

なんとか、50人近くは集めたものの、圧倒的に予定人数より少ない。ユーリの話じゃ最大人員は700人にもなる大型艦だっというけど。一応足りない人員はAイドロイド(簡単に言うとおボット)に任せることはできるらしいけど、人に比べるとどうしても突然の出来事に反応できないからできればなるべく使いたくは無いらしい。はあ、予想以上に集まらない。どうしよう・・・

???「すまないが、大型艦の船員を募集していると聞いたのだがココでいいのか？」

はっ!!いけない!!いつの間にか現実逃避していた!!

「あ!は、はい。ここで合っています・・・?後ろに何人か同じ格好の人がいますけど仲間の方ですか？」

???「ああ、大切な仲間達だ。俺も合わせて全部で五人だが大丈夫か？」

「もちろん大丈夫です!むしろ人員が不足しているので知り合いがいると助かるのですが」

???「いや、俺たちは“ここ”に来たばかりだな。生憎と知り合いはここにいますので全員だ」

「なんかいまの「ここ」って所で違和感があったような？・・・なんだろう？」

「分かりました。あと何をやっているのか一応聞いておきたいのですが・・・」

「???」ああ、俺たちは『傭兵』をしている。俺と横にいるやつはパイロットで、あとの三人はオペレータとして役に立つと思うが？」

これはラッキーです！！ユーリの話じゃ、艦載機も積むことのできるそうなので、まさに渡りに船！！

「分かりました。では一応傭兵団としての名前も聞いておきたいのですが？」

「???」ああ、俺たちは・・・」

Side:チエルシー end

Side:ユーリ

「・・・これをこっちに配備して、これをココにおいてつと、後は運搬用の貨物室にしておくか」

みんなと別れた後、おれは博物館に行った。エピタフは原作のように質屋に売るよりも、博物館のような歴史的なものを扱う場所のほうが高値で売れると思ったからだ。その予想は大当たり。最初は70000で売ってくれといわれた。これだけでも原作に比べれば七倍もの値がついた。しかし、

「いやー、エピタフですよ？平均的な駆逐艦で七隻分では少し少ないと思うのですが・・・せめて150000は欲しいですな・・・」

俺の作った艦の建造には10万近くかかるんだ！何があんでも値を上げないと！！

館長「いくらなんでも、それは無茶ですよ！せめて80000!」

「ならば、130000!」

館長「無理です！85000!」

「115000!」

館長「この分からず屋め！87500」

「120000!」

館長「なぜそこで値が上がる!?89000!」

と、このまま舌戦となっていき・・・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
館長「えーい！！持ってけ泥棒！！110000!」
「おし！売った!!!」

こうやって、何とか建造費を手に入れることに成功した。(出て行

った後、後ろを見たら、館長が真っ白になっていたけど・・・大丈夫だよ、きつとエピタフが親父のときのように何らかの幸せを運んでくれるから・・・たぶん)

ちなみにこの博物館、のちに風の噂で聞いたら、早速エピタフを展示して一躍、注目の的になったらしいが、そのせいで強盗の的にもなってしまうエピタフは盗まれてしまったらしい。幸いだったのはその盗んだ連中がかなり有名な盗賊集団だったのか、大々的に報道されて今ではかなりの有名美術館になったとか・・・

話がずれたが、元に戻そう。

建造のための軍資金を手に入れた俺は、その足で造船工場に向かった。最初この辺境のドッグで作れるのかなと思っていたが、艦を作るのはブロック形式で組み立てられていくので、ちゃんとした設計図と造船費があれば、“要塞”でなければ大抵はどこでもどんな船でも建造することができそう。

今は、その艦内をモジュール作成で、何をどこに配置させるのかを決定させている。原作と比べるとパネルで似たような感じで配置はできるけど、原作と違い3Dで配置していくため奥行きがあつて、明らかに原作以上のセッティングができて、うれしい誤算である。

・・・よし、後は、

「それじゃ、造船開始!!! (ぼち)」

ウィーン、ガコン、ガコン、ジ、ジジ、ジ、ジジジ、

おおー、目の前でどんどんパーツが組み合わさって船が作られていくのは見ていて壮観だな。流石に艦体が大きいため完成は明日になるそうだが、チエルシーに頼んだ人員への説明などもあるから調度いいだろう。

「ユーリ！！何とか人を集めてきたよ！」

おー！どうやら妹が人員確保から帰ってきたようだ。

「おつかれ、チエルシー。人員のほうはどれくらい集まったの？」
「うん、それなんだけど・・・デラコンダの『航宙禁止法』のせいであんまり集まらなくて60人ほど集めるので、せいっぱいだっ
た。ごめん」

「あー、誤らなくてもいいよ。最初からそんなに集まるとは俺も思
つていなかったし。それにここで60人も集めたのはすごいと思っ
よ」

「でも、その代わりに五人ほどベテランの傭兵さんが来てくれたの
！しかもそのうち二人は自分の搭乗機を持って！！」

「おお！それは良くやったよチエルシー！！・・・ん？けど艦載機
まで持っている傭兵が何で艦を持っていないんだ？普通は逆だろ？」
「それは私も気になって聞いてみたんだけど、海賊の奇襲をくらっ
て艦は轟沈。幸い少人数で操作できる小型艦で、パイロット二人の
機体に分乗してなんとか脱出、なんとかここまでたどりついたらし
いよ」

・・・なんか苦労しているな、その傭兵・・・

「そつえば傭兵っていつてよな。なんか呼び名とかあるのか？」

そこで俺はのどが渴いたのでお茶を飲む。うん、やっぱり前世とは
いえ、日本人には、やっぱりお茶はだよね～～

「うん、『サーペントテール』だつて「ぶーーーーー！！！！」
ゲホー！ゴホー！ガフ！」ちょー！ユーリ大丈夫？！」

「う、うん、大丈夫。ちょっと気管にお茶が入っただけだから・・・」
と言ったものの、内心ではそれどころではなかった・・・

「（いやちよつと待てよオイ！『サーペントテール』って『ガンダムSEED ASTARY』に出てくる傭兵じゃないか！なんでこの世界にいるんだ！？出るところ違うだろう！！！）「あ、それと」ん？まだなんかあるのチエルシー？」

「うん。その傭兵団のリーダーが艦長になるユーリに話があるんだって」

「俺に？」

「どうしても直接相談したいことがあるんだって。話によっては格安で雇ってくれてもかまわないんだって」

「????ますます、分からん。俺の知っている『サーペントテール』そのままならなんで俺みたいな新参者のところに来るんだ？それに相談したことって？」

・
・
・
・
そして俺は集まった乗員希望者に説明、及びどこに配属するかなどを着た後に、チエルシーとトスカさんを連れて『サーペントテール』との初対面をした。

「まずは自己紹介をしておきましょう。俺が今回人員を募集した艦長のユーリです」

「妹のチエルシーです」

「アタイはトスカ、トスカ・ジッタリンダだ。元は打ち上げ屋を
ていた」

そうすると向こうも紹介を始めてきた。

「俺は、『サーペントテール』のリーダー、ムラクモ・ガイだ。ガ
イでかまわん」

「俺の名はイライジャ・キール。おれもイライジャでかまわない」

「俺はリード・ウエラー。……とここで艦長、支給品に酒はある
かい？」

「リード！！すいません、私はカザハナ・アジャー。よろしくお願
いします」

「最後に私はロレッタ・アジャー。カザハナ・アジャーは私の娘よ」

「……どっからどう見ても、あの『サーペントテール』です。で
も、なんでこの世界に??？」

「では、単刀直入に言おう。……俺たちはこの世界の人間じゃな
い」

へっ????

.....

「ゲートに飲み込まれた？」

「ああ、向こうの依頼で謎の建造物が現れたから調査に行ってくれと頼まれてな。それで近くまできたらいきなり起動して、逃げようと思ったのだがブラックホールのように吸い込まれてな、目が覚めてみればもうこの世界にいた」

「ああ、びつくりしたぜ。目が覚めてみれば、見覚えのない艦がいたるところにいるし、俺たちの持っていた航路図がまったく役に立たないんだから」

「なるほどね、アンタらは『迷い人』ってわけかい」

あれ、トスカさん。なんか知ってるの？

「トスカさん、知ってることがあるんですか？」

「ああ、たまに原因は分からないけどデットゲートにだけ起きる現象なんだけど、異世界の物が流れ着くことがあるんだよ。世間ではほとんど知られていないけどね。アタシも一度だけその瞬間を見たことがあるんだけど、そのとき流れてきたのはジャンクにも出来ないほどに大破した見たことのない船だったけどね。そのことを後に空間通商管理局に聞いてわかったんだけど、そのときに生きた人間が流れてきた場合『迷い人』と呼んでいるそうなんだよ。『世界規模の迷子』ってことだね」

「幸い、その管理局はいつそのタイミングが来るのか分かっているように、監視のため来ていた船に助けられて、その後、最低限の物資ももらって今までは何とかやってきたんだが・・・」

「この間、そのデットゲートを見に行つて何とか帰れないかと調べてみたんだが、結局成果は無し。おまけに帰りに海賊の奇襲を受けて船は大破。どうしようもなく困っていたところにアンタらの話が転がり込んで来たつてところだ」

・・・とことん運がついていないな『サーペントテール』

「俺たちの相談というのは、元の世界へ帰るための情報収集を手伝ってほしいということだ。それに協力をしてくれるというならば格安でかまわん」

「・・・いいでしょう」

「いいのかい、ユーリ」

「すまない、助か」「その代わりに」・・・何かあるのか？」

「そっちの世界に行く方法が見つかったら俺たちも一緒に連れて行ってほしい。俺たちの旅の目的は世界を見て回るからだからな」

「・・・ならば問題ない。これからよろしくたのむ“ユーリ艦長”」

「こちらこそ。できれば艦載機部隊の隊長になってくれるのならありがたいんだけど・・・」

「それくらいならば問題は無い」

予想外のハプニングがあったものの、優秀な人材が集まってくれて助かった。

ちなみに、彼らが持ってきた機体は「アストレイ ブルーフレームセカンド」と改造のされた「ザクウォーリア」だった。両機体ともこちら側の技術のインフラトン機関に動力系統を変更しており。こちらでの戦闘を可能にしていた。

彼らの配置は、ガイとイライジャのは艦載機部隊と非常時には白兵戦部隊の担当になってもらい、カザハナとロレッタにはオペレーター班に、最後にジードにはリーダー班になってもらった。ここでついでに言っておくとトスカさんは操舵、チエルシーは生活班の料理部門を担当してもらっている。

そして翌日。

借りたドックを一望できる場所には一緒に乗ってくれる仲間、総勢68名が集合していた。

「今回は俺の船に乗ってくれることになって、どうもありがとう。
俺の目的は単純にこの世界を回って見ることだ！俺はこんな辺境で
一生を終える気は無い！！！！」

「へー、若いけど根はしつかりしているようね」

「だけど、ゲートを突破できるのかな？・・・デラコンダの警備隊
で封鎖されてるって聞いたけど・・・」

「ま、俺たちもこのままで終わるのがいやでここに来ただけだな。
艦長のお手並み拝見だな」

「・・・「「「「「「「「「」

みんないいように言っているな・・・くくく、そんな台詞もこの
艦を見れば吹っ飛ぶだろう。

「ふふふ、みんなの言うとおり、ゲートには中古艦隊とはいえデラ
コンダの艦隊がいるらしい、そこで！！おれはこんなものを用意し
てみたーーーー！！！！！！」

ガコン！ウィーーーーー！！！！！！

その言葉を合図に俺の後ろのシャッターが開いていく・・・そし
て、その先にあったのは・・・

「「「「「「「「「「「「「「（啞然）「「「「「」

ふふふ、驚いてる、驚いてる

「これが！俺たちの船！『航宙戦艦 ヒューベリオン』だ！！！！！！

「！」

「そう！俺が作り上げた戦艦は『銀河英雄伝説』に出てくる、『魔術師』の異名をとる人の船にして、艦隊の旗艦をつとめていた船を改造したものだ！！」

「この船は、俺が何年もかけて設計をして、数多の失敗作を出しつつも完成させた船だ！！全長は2000m、全幅350m、全高600mの弩級大型戦艦だ！！主砲は艦首に内蔵する形に取り付けられた縦八、横五にならべられた40連装大型レーザー砲！さらに両舷にはこれも内蔵型のミサイル発射管をそれぞれ10門装備！！さらには艦体のいたるところに装備した近接防御、及び対空迎撃用3連装小型レーザー砲を装備して対空能力も万全！！さらには艦底部には艦載機の発着場までも備えた！！レーザー関係も並みの機能ではなく、やろうと思えば艦隊の旗艦をつとめる事のできる情報収集力だ！！どうだ！驚いたか！！！」

ふふふ、どーよ！！

「……………（呆然）……………」

「……あれ、反応が無い？なんか失敗した??？」

「……………な……………」

ん？

「……………なんじゃこりゃ……………！！！！！！……………」
「うお！！びつくりした！！！」

ロウス編 3 (後書き)

次は、デラコンダ艦隊との戦闘です！

初心者ですが、がんばって書こうと思います！！

では！！

ロウス編 4

Side:トーロ

「トーロ、もうすぐトトラスに着くぜ」

「おう」

ふう、やっと今回の仕事が終わるぜ。まったく、バツシヨの酒場の親父め、こんな精密機械の塊を運ばせんじゃねーよ（怒）。こつちは小型艦で運んでいるから、余計に慎重に運ぶためいつもの三倍の時間はかかったぞ！！

ま、それももうすぐ終わりだ、トトラスの酒場に着いたら一杯引っかけるとするか。

「こちらはトーロ輸送団だ。管理局、着艦許可をくれ」

『申し訳ありませんが、今から大型艦が出航するため、危険防止のためにこちらが指定する場所で待機してください。安全を確認したしだい誘導を開始します』

ん？大型艦だと？いままで、こんなことは無かったな？いくら大型艦といっても一隻で危険防止のために待機させられることなんて無いからな。デラコンダの奴の旗艦クラスが十隻ぐらい一編に出るのか？

「・・・？いくら経っても大型艦用のハッチが開かないじゃないか？何やってんだ？」

「そうだな・・・ん？・・・ト、トーロ！！そつちじゃない！反対側のドックだ！！！！」

「あん？そつちは使われないことが無い『弩級艦』クラスのドックじ

『医務室も問題無いわよ』

『こちらチェルシー、調理班にも問題無しよ』

『会計班だ。こっちも特に問題は無いよ』

「どうやら、どこにも問題は無いようだね。それにしてもホントいい船を作るじゃないかいユーリ」

「どーも、トスカさん。でも俺はまだこの一隻で満足するつもりは無いですよ」

「はは！OGドッグたるもの、それくらいじゃないとね！！」

ここで、サーペントテール以外の実力者を説明しておこうと思う。まずは、機関部担当のガンドル一家からだ。元々はトトラスで仲間一緒に工場で働いていたらしいのだが、『航空禁止法』のせいで肝心の船の注文が来ないうえに、完全機械化になってしまったために首になったそうだ。彼らもベテランだから正直言うと助かったが、ちなみに見た目は山賊と言われても不思議じゃない。豪快な性格。次に医者のレストランだ。こっちは元々色々な国を見て回っていて、この艦に乗った理由もトスカさんと似た感じで、「面白そう」というのが理由という軽い感じの人だ。見た目は中華系の人でさっきも言ったように軽い。・・・でも、時々怪しい薬作りに夢中になってしまつらしい（汗）。

最後は、会計班のリントツさんだ。元々はトトロスのある会社で働いていたけど、詐欺にあつてしまい財布の中身がスツカラカンのところ、に俺たちの話を聞いたらしい。見た目はエヴァに出てくるシンジ君の髪を白に染めたような感じで、性格も似たような感じである。

さてと、紹介をしている間にゲート付近の宙域まであと少しといったところまで来たようである。それじゃあ・・・

「ガイ、聞こえるか？」

『どうした？まだ戦闘には早いと思うが？』

ん？何やつているかだつて？椅子じゃなくて机の上に乗って、あぐらをしているだけだよ？某魔術師の真似をしているだけ。

「なについて言われても座っているだけですけど？」

『貴様！ふざけているのか（怒）！！！！』

「ん？タコの言ってる事なんて俺には分かりませんね〜」

『（ぶちっ！！！！）』

.....

「か、艦長・・・いいの？あんな挑発をして・・・
いいの、いいの。これも作戦だから」

でないと、流石に艦の性能はこつちが圧倒的に上だけど数が数だからな・・・弾代だつてタダじゃないし。

「まずは挨拶代わりだ！！主砲発射準備！！目標、敵左翼艦隊！！
発射角も広げて弾幕の撒布面積を広げろ！！」

「了解・・・発射準備完了！！いつでもいけます！！」

「よし、撃て！！！！」

Side：テラコンダ

「あの小僧（怒）・・・ただじゃ済まさんぞ！！！！」

こんなに怒りを覚えたのは久しぶりじゃ！！あの小僧、塵すら残さずに殲滅してくれるわい！！！！

「了解！・・・これは！敵艦隊の一部が突撃を開始！数は20！！」
「両舷ミサイル発射口を開け！！射程に入り次第、攻撃開始！！弾頭は一射目が多弾頭弾！それで足を止めた後、二射目以降は通常弾で攻撃！！」

ガコン、ガコン・・・バシユバシユバシユ

一度真横に発射された20本のミサイルが敵艦に反応してそれ目掛けて飛んで行き、途中で内蔵されたマイクロミサイルを敵艦に雨のように撃つていく。大半の艦は元々中古の使い古された100m級の安物艦だったからこれだけで行動不能になったが、運のいいのが残る。しかし、その残った艦には通常のミサイルが直撃してデブリになっていく。そんな中をまれにレーザーが飛んでくるけど、艦を覆っているAPFシールドによって全部はじかれて、有効打を与えないことができない。

説明をすると、APFシールドとは“Anti-energy Proactive Force Shield”（アンチエナジー・プロアクティブ・フォース・シールド）日本語にすると“対エネルギー・プロアクティブ力場遮断”の略で、簡単に言ってしまうとバリアである。

強力なフォース・シールドによって艦体を覆い、敵弾（指向性高エネルギービーム）の到達を防止するシステムで、この世界における全ての艦艇の基本装備となっている。ただし、ミサイルなどの実態弾には効果が無いがこの戦いでは関係ないだろう。

「・・・そろそろだな。トスカさん！後退を開始！！例の作戦に移ります！！」

「あいよ！！操舵は任せな！！」

Side:デラコンダ

「敵艦、徐々にですが後退しております!」

なに?! やつらは逃げる気か?!

「デラコンダ様、敵艦より通信が来ておりますが・・・」

「なにい?! こんな状況でだど?! 繋いでみる!」

「了解、繋がります」

ウン・・・

「貴様・・・一体どういっつもりだ?!」

出されたパネルの向こうでは相変わらず机の上であぐらをかいて
いる小僧がいる。

「ん? 何ってそろそろ休憩でもしないとみんなきついからね、一
度後退して立て直すだけだよ? そっちも一度後退したら?・・・」
「タコらしく海に帰って」ね

ウン・・・

「通信、切断され・・・ま・・・し・・・た(汗)」

「(ゴゴゴゴゴゴ・・・) もはや勘弁ならん(怒)!!! 全艦突撃

!! 奴を生かして帰すな!!!!!!」

「し、しかしこれは罠なのでは!」

「うるさい!! 貴様は言われた通りにしろ!!」

「ひ・・・りよ、了解しました!!」

Side:ユーリ

「ユーリさん!! 敵艦隊全艦が突撃を開始!! まっすぐにこちらへ向かってきます!!」

「どうやら、ユーリの作戦通りに行きこうだね」

「ホントですよ、デラコンダが挑発に引っかかりやすい短気な性格で助かりましたよ。リードさん、ガイさん達の位置は?」

「問題ないぜ、もうすぐ予定ポイントだ。しかし、このレーダーものがすごく感度がいいな デブリの中もこいつにかかければ丸見えだぞ」

「OK。ロレッタさん、艦載機部隊に連絡! 『合図有り次第攻撃開始』と!」

「了解、まかして」

「トスカさん、スピードを落として敵艦隊の射程内に!! こちらに注意を引き付けます!!」

「まかせな!!」

Side:デラコンダ艦隊、名も無き艦長

「敵艦、速度低下! まもなく射程圏内です」

「どっしたと言っただ?」

「機関部のトラブルか? なんにせよチャンスだ、砲撃準備!!」

「・・・準備完了!! いつでも行けます!!」

「よし、撃て」

ドゴン！ドゴン！

「うお！？な、何が起きた？！敵艦からの砲撃か！？」

「ち、違います被弾場所は艦底部と機関部、後方からの攻撃です！

！」

「ば、馬鹿な一体どこにそんな兵力が？！」

「か、艦長！！前！前！！！」

「なに！そ、そんな馬鹿な……」

前に向き直り見えたのは、ガトリング砲を構えた青い人型艦載機がこちらに向かって今にも撃とうとしている光景だった。

「ひ、人型艦載機だと……」

そして俺は、その機体に描かれている『蛇』のパーソナルマークを最後に見て、艦と運命を共にした……

Side：デラコンダ

「右翼艦隊に敵艦載機による攻撃により被害多数！！救援要請が来ています……！」

「ば、馬鹿な！？一体どこから来たと言うのだ？！あの艦から発艦して行く様子はまったく無かったぞ……！」

奴は魔術でも使ったと言うのか？！？！

「デラコンダ様！！すでに我が艦隊は当初の半数になっています！
このままでは……」
「こうなれば……『デラコンダ砲』スタンバイ！！艦載機部隊の
帰る所を無くしてやれ！！」
「りよ、了解！！」

『デラコンダ砲』とはデラコンダ艦隊旗艦の『グロリアス・デラ
コンダ』の左舷に取り付けられた超大型レーザー砲である。並みの
船では一発当たただけでも致命傷だが、流石に自分よりも遙かに
でかい艦にどれほど効くか分からないし、発射後は無防備になっ
てしまうため今まで撃たなかったが、もうデラコンダはそんなことを
気にしている余裕は無かった。

「……標準固定良し！発射準備完了！」
「くくく、奴らに目に物を見せてやれーーーー！！！！！！」

……だが、結局目に物を見せることは出来なかった。

ドゴン！！ドドドドドン！！

「うお！！被弾したか！？被害報告！！」
「……そ、そんな『デラコンダ砲』に艦載機による攻撃が直撃、
大破！！だめです！エネルギーが拡散！砲撃できません！！」
「そ、そんな馬鹿な……」
「！！敵艦、急速接近！！本艦を狙っています！！デラコンダ様！
！！」

だが、最後の逆転の可能性を潰されたデラコンダにはもう何も聞
こえていなかった……

S i d e : ユーリ

「へえ、ユーリの作った無人艦載機、最初見たときは変な形だと思っただけで実際に戦闘なってみれば、トリッキーな動きで攻撃を見切りにくいから結構いい感じじゃないかい」

「やろうと思えば、コックピット部分を変えて、ちゃんとした有人機にもなりますよ。・・・多少コツはいるでしょうけど」

「『ワルキューレ』さらに2隻、いや3隻の撃破に成功！敵艦隊は大混乱に陥っています！！」

そう、俺の作った艦載機とは、これまた『銀河英雄伝説』に出てくる帝国軍艦載機の『ワルキューレ』総数50機である。え？『ヒューベリオン』とは陣営の違う機体だって？いいの！俺が好きなんだから！！

原作の『ワルキューレ』は横に長い「コ」の字を2つ、縦棒の部分で直交させて繋げたような構造になっていて、直交部を軸にして砲塔部を360度回転させられるようにおり、通常の戦闘機に比べて圧倒的に射界が広く、武装は四つのレーザー砲が装備されている。俺の作った機体は、それに本体の部分の上下に小型のレールガンを計2門装備して攻撃力の底上げをした物だ。

ガイ達、艦載機部隊にはこの付近のデブリ郡に『ワルキューレ』と一緒に隠れてもらい、俺たちが引き連れてきた艦隊も通り過ぎたら、合図と共に背後から攻撃するように打ち合わせをしていたのだ。

「ガイが合計4隻の撃破に成功、イライジャも今2隻目を落としたわ」

「あ！敵旗艦の主砲に高エネルギー反応を確認！！」

「なに！？ちっ、回避行動を！！」

「さてと、行くとしますか！新たな宇宙へ……！」

ロウズ編 4 (後書き)

ワルキューレが分かり難い人は『銀河英雄伝説』を見てください!!

次は番外編です!!

感想待っています。なんかアイデアがあればよろしくお願いします。

なお、流石にちょっと疲れたうえにレポートもあるので、次の更新まで少し空きます。ご理解おねがいます。

それでは!!

ロウズ編 番外

さて、一段落した事だし現在の状況を説明していこうと思う。

前回の戦いは、デラコンダの旗艦を落とした時点で決着がついたと言っている。まだあの時点では30隻前後の艦隊が残っていたが、旗艦を落とした途端に次々と降伏の信号を出して機関部を止めた。デラコンダはあまり人望があるとはいえなかった様だ。降伏した艦艇は全て接收して人員はそれぞれの故郷に帰した。だけどこの時に何人かが「このまま残りたい」と言うことがあった。そのほとんどは純粹に宇宙に憧れを持っていただけ、デラコンダのせいで旅に行けなく、しかたなく軍に志願してパトロール艦隊で我慢をしていた連中だった。(もちろん、変なことを考えていた連中や、何か企んでいる連中には全て白状してから出て行ってもらった)

次に、今回の収入については総数13隻が無傷で手に入り、そのほかには、小破した艦艇が8隻、中破が11隻、大破が5隻で、残りにはジャンクとして売り払うことができた。別に艦隊として取り込むことも出来たのだが『ヒューベリオン』とは性能差がありすぎて話にならなかつたため全部売り払った。(ちなみに、デラコンダの旗艦はあまりにもばらばらでジャンクにすることすら出来なかつた)金額はジャンクでも一隻につき100G前後で、無傷の艦なら100倍の1000G前後で売れた。その他の損傷がある艦も傷の度合いによって値段を下げられたが、それでもジャンクに比べれば高値で売れた。その結果総額、約32000もの原作の序盤ならばかなりの金額となった。

しかし、原作のゲームと違って乗組員の給料や弾薬の補充、あとワルキューレの整備と修理などもあつて実際は22000ぐらい(それでも大金)となった。

そして今何をしているかという・・・

事実、先の戦いで単純だが有効な作戦をした。たいていのやつは舞い上がったたり、意味も無く複雑な作戦をとって逆に窮地に陥ったりするが、ユーリはあえて単純な作戦で勝利に導いた。司令官としての才能はまだまだ荒いが十分にやっていけるだろう。

「どちらにせよ、今後長い付き合いになるんだから頑張っていこうぜ！」

「・・・ああ、そうだな。・・・ところでさっき、ガンドル達と何か話していたようだが？」

「ん？ああ、あれな。この先、今までの艦艇が玩具みたいに見えるほどの艦がうじゃうじゃいるらしいからな、ガンドル達と相談してザクのパワーアップの算段をな」

ふむ・・・確かにこのままだとブルーフレームの武装ならまだしばらくは通用するが、ザクだと少しきついか・・・艦長に相談してみるか。

Side:ユーリ

「それにしてもユーリ、アンタよくこんな船を考え付いたもんだねくくく切っ掛けとかあったのかい？」

「トスカさん、すでにもう酔っ払いかけていませんか？」

「いいの、いいの。それよりもアタシの質問に答えなっつて」

「（大丈夫か・・・？）ま、まあ最初は明確なイメージは無く、とにかく色々と試して今の形になったんですけどね・・・没案ではもっと特徴的な船もありましたけど基になる設計図が無いから、結局はヒューベリオンみたいな結構形がシンプルなのが最初の設計図

でしたね。その後、いろいろと改良を加えて今の形になりましたけど」

まさか元ネタがあつて、それを目指して作ったなんて言えないからな。

「そういえば、ワルキューレの損傷がひどいって聞いたけど、どうかしたのかい？」

「流石に戦闘機タイプをデブリに紛れ込ませるのは無茶があつたらしくて、戦闘が原因のもあるんですけど、デブリと接触したりしてフレームが歪んでいるのが何機がいたらしくて、おかげで今ドッグのほうで半分以上がオーバーホール中ですよ」

これは地味に痛い出費だった。今度から高速戦闘はワルキューレ、奇襲・艦防衛などは人型機に役割分担したほうがいいな・・・ガイさん達に頼んでMSモビルスーツのデータもらってザクを量産しようかな？

どたどたどたどた・・・

「はあ、はあ、こ、ここにいたのか！ やつと見つけたぜ！！」

「ん？ なんだい、人がいい気分で酒を飲んでるっていうのに」

「あれ、確かおまえってトーロか？ バツジユの酒場で会った」

これって、もしかして・・・

「頼む！ 俺もお前の船に乗せてくれ！！！！」

やっぱり・・・このイベントだったか。

「聞いたぜ！ デラコンダの艦隊をやっつけちゃったんだって！ 俺も

こんな小さくて辺境の領地を出て旅をしたかったんだけどよ、『航
宙禁止法』もあるから唯一、例外だった輸送団で我慢してたんだよ。
それに肝心の船も無いからな、輸送船じゃ海賊に襲われたら終わり
だしな。

「ただど、『航宙禁止法』を作ったデラコンダはもういないし、何
よりもあの船なら海賊なんかを気にしなくてもやっていける！！輸
送団はもうケチャックに譲っちまったんだ。むげに断るなんてすん
なよ。頼む！この通りだ！！！」

「まったく、しょうがないな・・・」

「・・・ちゃんとこっちの指示には従ってもらおうよ。それが出来る
んなら問題は無いよ。幸いなことに人員の募集はまだ締め切ってい
ないから」

「ほ、ホントか！！感謝するぜ！！・・・実を言うとな、あの艦
の出航をまじかで見ていてな、乗りたくなっちまったんだよ。いや
ーありがとう！心の友よ！！！」

調子のいい奴・・・ま、なんにせよ新しい仲間が増えたな。

「そういえばチエルシーはどうしたんだい？姿が見えないけど？」
「さつき、やり掛けの仕事があるから」これだけ終わらせてから行
く」って言っていましたよ。だけど遅いな・・・ちよつと手伝ってき
ますよ」

「あいよ、こっちは任せときな。彼女を迎えに行つといで！」

「一応、義理とはいえ妹なんですけど・・・ま、頼みますよ」

だが、俺はデラコンダとの戦いで完全に忘れていた。チエルシー
のある特徴を、原作では無かった特徴を・・・そして、偶然が重な
つてある意味悲劇が起こることをこの時点ではだれも分からなかつ

た。

Side:トスカ

「さてと、もう一杯飲むかな・・・おんや？」

あれ、チエルシーじゃないかい？すれ違ったか？

「あ、トスカさん。ユーリ見なかった？やっと仕事終えてきたんだけど」

「あー、タイミングが悪かったね。ちょうど今様子見に行っちゃったよ。どうやらすれ違っちゃったようだね」

「そうですか・・・あ、トスカさん。私も一杯もらっていいですか？」

「あん？ああ酒かい？良いに決まってるだろ、ここは酒場だよ」

「ありがとうございます。ユーリは私に全くおいしいほどお酒を飲ませてくれませんか（くび、くび）」

「お、そうなのかい？ユーリも勿体無いね、この味が分かんないなんて・・・あれ、でもさっき普通に飲んでいただけ？」

「ユーリは時々だけとお酒飲むですよ。私には飲まさないだけで（あれ、なんかフラフラしてきたような・・・？）」

ん？じゃあ何でユーリはチエルシーに飲ませないんだ？って、あれ？

「チエルシー？ど、どうかしたのかい？さっきから俯いてるまんまだけど・・・」

「・・・トスカさん、メーザーブラスター持っていますか

「こないで！こつち来ないで！お願いだから！！・・・あー！！！！」

「俺、このまま無事に済んだら・・・ごぼあ！？！？！」

「・・・もはや收拾不能だねこりゃあ・・・一体どうすればって、あ！」

「きゅ~~~~~~~~」

「どうやら完全に酒が回ったようだね・・・しっかし一体何が・・・」

「どうやら、すれ違いみたいだったな・・・チエルシーいるか~~~~
って、どわあ！？！？なんじゃこりゃあ！？！？」

「どうやら帰ってきたようだね・・・」

「ユーリ、チエルシーが酒を飲んだ途端にブラスターを乱射し始めたんだが、知ってること洗いざらい全部言いな・・・」

「げ！？チエルシー酒飲んじゃったの！？・・・まあ、この状況を見るとそれ以外無いか・・・」

「何か知ってるのかい？」

「・・・実は一度家でもチエルシーが酒飲んで暴走したことがありまして・・・その時は部屋の中が半壊しました。どうやらチエルシーは酒が入ると酒乱の上に『ハッピートリガー』になるらしくって、対処方法は飲ませない以外ありません・・・完全に忘れていました、すみません・・・」

「・・・今度からチエルシーにはジュースしか飲ませないようにしないかね」

「全く持って同感です・・・」

ロウス編 番外（後書き）

やっぱり、チエルシーには何かあった・・・

酒が入ると暴走します。

次から新章です！！

それでは！！

ラッツイオ編 1

Side：スカーバレル海賊団

「兄貴、この辺ってあまり獲物がいませんよね」

「まったくだ。このロウズ方面行きは他に比べて行き来する船がデラコンダのやつ、『航空禁止法』のせいで、圧倒的にすくないからな」

ピー、ピー、ピー

ん？本部からの連絡か？どれどれ……………お！

「でも、そのデラコンダですけど、『つい数日前にOGドッグにやられちゃった』って連絡がたった今本部から来ましたぜ。これでロウズの『航空禁止法』がなくなってこっちに来る奴が増えるかもしれませんぜ！」

「なに！そいつはいいや！！これで俺たちも甘い汁が吸えるってもんだぜ」

「じゃあ、さっそくロウズ方面のゲート付近にいつて待ち伏せしましょうやー！！」

「おう！！進路変更、ロウズ方面ゲート！！」

だが、彼らは考えていなかった。その『デラコンダを倒した奴が来る可能性』を……………

・
・
・
・

・ ・ ・
場所：ゲート付近

「兄貴、2番艦から5番艦、全艦配備完了。本艦もいつでもいけるぜ」

「ふっふっふっ、ゲートを越えてきた艦があれば少し進んだところで、まずは4、5番艦が獲物の後ろについてゲートへ逃げるのを封じる。そうして前進しか出来なくなれば、とどめに本艦を含む3隻で完全に押さえ込めば、後は奪うだけだぜ。くくく」

早く来なよ、俺たちの獲物よ～～～

「兄貴！ゲート表面に波を確認した！くるぜ！！」

おっしゃ！来たか獲物～～～～

「よし、全艦に通達！奴をしとめ・る・．．．ぞ？」

おい、ちよつと待て、なんで波がゲート全体に出ているんだよ・
・ この辺の船の平均的な大きさは、せいぜい全長100m～300
mで、大きくても巡洋艦の「ゲル・ドーナ級」や「オル・ドーナ級」
の450mが限界だぞ・．．明らかに、そのサイズが出てくるよう
な揺らぎじゃないぞ、普通なら真ん中に少し波が出来る程度なのに・
・

「な、なにが来るんだ・．．」

「あ、兄貴・．．出てくるぜ・．．」

なったこのゲートを目指してくる奴を餌にしようとしたようだが・
・逆に餌になったな。

総員、第一級戦闘態勢！！艦載機部隊は後方の「ゼラーナ」を狙え！本艦は前方の3隻を攻撃する！！行くぞ！！！！」

ま、この後は書くほどでもなくあっさりと片がつき、3隻の「ガラーナ」はジャンクに、「ゼラーナ」2隻は武装と機関部を破壊されて投降してきた。

その後は、この宙域を回って運送業のようなこと（元運送屋だったトーロのおかげでかなり効率が良い）をしつつ、海賊狩りで資金を貯めている。金はいくらあっても足りんからな。ちなみに人員への給料は何事も無ければ運送業だけで何とか足りた・・・だけど、その内に今ある倉庫は何かしらのモジュールに変更するからな・・・輸送船も作っておいたほうがいいかな？原作と違って何隻でも作って引き連れることができるんだから。それに護衛艦艇も早く作らんとな、このヒューベリオンには“ある弱点”があるからな・・・

そんなこんなで、いつも通り海賊狩り&運び屋をしていたら・・・

「艦長、前方にスカーバレル海賊団だ。だけど、今日のはいつものと違うな・・・こりゃあ、幹部クラスの巡洋艦「オル・ドーン級」だ！」

「ユーリさん！敵艦から通信が来ました。繋がります！！！」

「貴様がユーリだな。俺はスカーバレル海賊団幹部「デイゴ」だ。子分どもがずいぶんとかわいがられた様だから、お礼にしてきたぜ」

お礼ね・・・どんなのは分かりきっているけど。

「で、その肝心のお礼は？」

「お礼は・・・これだ！！！！」

「ユーリ！！左右から敵艦隊だ！！デブリを纏って完全に隠れていやがったな！しかもこれは・・・左右両方ともミサイル巡洋艦「ゲル・ドーネ級」を旗艦としたミサイル艦隊だ！数はそれぞれ5隻！こいつは不味いぞ！！」

まズったな、待ち伏せか。しかもご丁寧に左右からの同時攻撃かよ、さらにこの様子からだと弱点がばれたな・・・

「ヒューベリオン」の弱点、それは左右からの攻撃に弱いことだ。艦首に装備された主砲はいくらか射角が調整できるといえ、あくまで前方にしか撃てないつくりだ。両舷にはミサイル発射管があるが、専門であるミサイル艦に比べればどうしても射程が短いため、迎撃にしか使えない。レーザー攻撃が主体ならAPFシールドでなんとかなるがそれを見越してでの配置だなこりゃ・・・

「敵艦からミサイルを確認！ユーリさん！！」

「両舷ミサイル発射口を開け！弾頭はデコイ！それでも残った奴は対空レーザーで打ち落とせ！！！！」

バシユ、バシユ、バシユ・・・ドン！ドドン！ドン！ドドドン！

「第一波の迎撃に成功、しかし、すでに第二、第三波が来ます！！」

「ロレッタさん！艦載機部隊に出撃命令！！艦の周りでミサイルの迎撃を！！」

「分かったわ！！」

「だけど、ユーリどうするんだい？！このままじゃジリ貧だよ！幸い後方に敵艦隊はいない、後退して体勢を立て直して反撃したほうがいいんじゃないかい？！」

確かに後退したほうが・・・いや待てよ、これは・・・

「ちっ、罷か!！」

「だから、そんなことは分かって・・・」

「違いますって、この攻撃は囿!本命はおそらく後方にいます!！」

「なんだって!！」

「俺たちを包囲して殲滅するなら、わざわざ綺麗に正面と左右からじゃなくて、等間隔に3方向に囲んで攻撃した方が良い、けどこの敵はあらかじめ逃げ道を作っている。おそらくはミサイル艦隊と同じくデブリを艦体につけてごまかしているか、機雷でも置いて待ち伏せしているだろう」

「・・・ちっ、言われてみれば納得がいくね。二重の待ち伏せってわけかい」

「だけど、ユーリどうするんだよ!?!このままじゃ!！」

安心しなトーロ。

「なら、敵の策に乗らなきゃ良いんだよ!!--作戦は・・・」

S i d e : デイゴ

「そろそろ後退をし始めるかな?まあ、そうならば後方に隠れている艦体の餌食だな・・・」

その後は、“例の任務”になるはずだ。その後は・・・

ヴイー!ヴイー!ヴイー!!!

「どうした!何事だ!!!」

「こ、これは!?!敵艦に動きあり!しかし・・・せ、前進してきま

エルメツツア中央政府軍か・・・

「トスカさん、どう思いますか？」

「ラツツイオはエルメツツアの領土の一つ何だから軍がいても不思議じゃないけど・・・タイミングが良すぎる気がするね・・・」

「ユーリさん、そのエルメツツア艦隊から通信が来ています」

「ん？繋げるかい、カザハナちゃん」

「戦闘の影響か通信状態が悪いので音声だけですが・・・それと「ちゃん」は止めてくださいって言いましたよね・・・」

「ごめん、どうも反射的に・・・」

「まあ、とにかく繋いでくれ」

『ザ、ザザ、ザ、ザザザ・・・こちらはエルメツツア政府軍所属、オムス・ウエル中佐だ。そちらは大丈夫かね？』

「ご心配ありがとうございます。こちらはOGドッグのユーリです。援護、感謝します」

『ふむ、それは何よりだ。しかし、あれほどの艦隊が君のたった1隻に（と言ってもかなりの大型艦だが）向けて攻撃をするとは・・・後でラツツイオ軍基地に来てくれるかね。色々と質問がしたいから』

「え、あの・・・」

『では、待っているぞ』

答えを聞かないまま行ってしまった・・・しかも、なんかぼやいていただけ。

「なんか面倒なのに目を付けられちゃったね~~~~」

「なんだか強引だったような・・・」

「こりゃ・・・何かに巻き込まれちゃったかな？」

ラッツイオ編 2

Side:ユーリ

前回、オムス中佐に来るよう言われたが、実はまだ行っていない。別に向こうは“いつ”来るように言っていないから暇ができたら行こうと、クルー全員で決定した。

それで、今は何をしているかというラッツイオ軍基地の周辺惑星で情報収集と、新しい船員の募集である。

なぜいまさら船員募集なのかと言うと・・・作ったからである、「船」を。といっても辺境のロウズで設計図を手に入れられる駆逐艦「アルク級」だけ。少しばかり所持金に余裕が出来たので輸送船団を作ることにしたのだ！元々、「アルク級」は輸送船を改造し、駆逐艦としての武装を最低限のせただけの船で、いまでは完全に元となった装甲輸送船となっている。ちなみに全部で6隻、武装は完全に対空兵装のみで対艦戦は一切考えていない。あくまでも近接防御のみの船である。まあ、いずれ拡張性の高い船が手に入ったらそっちに入れ替えるつもりだけ。

え？なんで護衛艦を作らないかって？答えは簡単だ、設計図を持っていないからである。いくら神達からもらった頭脳があるといっても、「ヒューベリオン」のように一から設計したら何年もかかってしまう。既にある設計図を改良するならばそれほど手間はかからないんだが・・・生憎、今は持っていない。

情報収集の方はこの先、スカーバレル海賊団とはいやでも戦わなといけないので、向こうの情報を手に入れるためだ。海賊だつて襲って奪うだけで無く、どこからかは物資の補給をしているはずだ。それが分かるだけでも今後がやり易くなってくる。

そんなわけで今俺たちは惑星「クラーレ」の酒場にいるのだが・

「カリオ？」

「ええ、惑星「フィオン」にあるイスモゼーラ社の社長なんですけど、なぜかこの先の町から少し離れたところで暮らしているんですよ」

なんでわざわざこんなところに？こいつは、行ってみる価値ありだな。

・・・で、到着。さっそくなかに。

「すみませ〜ん、カリオさんのお宅で合っていますか？」

「（がちや）お客ですか？とりあえず、中にどうぞ・・・」

では、遠慮なく・・・

「・・・確かに、私はイスモゼーラ社の元社長、カリオ・イスモラーザですが・・・一体なんの御用で？」

「スカーバレル海賊団についてなんですけど、なにか知っているのではないかと思ひまして・・・わざわざこんなところに住んでいるんですから」

「スカーバレル・・・確かに奴らにはいろいろと関係があります。先代を殺して私を追い出して会社をいい様になっているんですから・・・」

ビンゴ。やはり物資の補給はあの会社か・・・

「ユーリさん。あなたはスカーバレルと戦う覚悟がありますか？」

「・・・ごつやって情報を聞きにきたのが答えだと思えますが」
「おお！ならば私もあなたの船のクルーにしていただけませんか？
これでも整備に関しては自身がありますよ！」
「こちらには断る理由がありませんよ。これからよろしく願います」

有能なクルーが増えたぜ こないだもザクのデータをガイ達から
もらって量産も開始したから、手が回らなくなっていたんだよな。
これで“強化装備”の設計にも力が入れられるぜ。

Side:チエルシー

私は今、今回の募集で来てくれた人たちの案内をユーリから頼ま
れている。募集の広告を見てもらい、今いる「ラッツィオ」以外の
惑星の人には自力で来てもらっている。(もちろんその場合、移動
のためのお金は払っている)ユーリに聞くと、

「何回もやるのは面倒だから」

とのこと、来てもらった人にはドッグのヒューベリオンが一望で
きる場所に集まってもらう形になっている。そのため、みんなまだ
どんな船なのか知らない。なんせ“船員募集”としか言っていない
んだから。

???「チエルシー、そろそろ説明の時間だよ」

「あ、分かりました。“ティータ”さん」

今出てきたティータさんは、元々はこのラッツィオの酒場で働い

ていたんだけど、これがなんとトーロの幼馴染ということが発覚！
あのときはいろんな意味ですごかったな・・・はやし立てられたり、
嫉妬の目で見られたり・・・

その後で、軍に入った兄のザツカスが音信普通になってしまった
ため、軍に行くという話しを聞き、乗せてもらえないか頼んできた。
もちろんユーリの許可をもらって、今は私と一緒に説明役になっ
てもらっている。

「このたびは、私達の募集に来てくれてありがとうございます。私
は今回の説明役のチエルシーです。質問があればどうぞ」

そうしたら二人の人が手を上げた。

「質問がある、私は傭兵部隊「トランプ隊」のリーダー「ププロネ
ン」だ。でこっちが」

「サブリーダーの「ガザン」だ。アタシ達が聞きたいのは、この船
に艦載機部隊はいるのかい？アタシ達が得意とするのは艦載機によ
る攻撃と白兵戦だからね。そこはどうなんだい？」

おお！パイロット志望の人がいた！しかも傭兵！！

「その点なら大丈夫です。自分達の船は戦闘機型と人型機の二種類
の艦載機部隊を持っています。今はまだ肝心のパイロットがいな
いため、ほとんどが無人機使用なのでパイロットの方は大歓迎です！
「ほう、人型機ですか！では、そろそろあなた方の船を見せてもら
ってもかまいませんか？艦載機は良くても、肝心の船の性能が良
くなくてはあまり乗りたいとは思いませんからな」

「そうだ、そうだ！早く船を見せてくれ！」

「募集じゃ特徴が書いてなかったからどんなのか分かんねんだ！」

「一体この艦載機の設計図はどこの惑星で売っていたのですか？」
「え〜と、ププロネンさんですね。この機体は、私達の艦長ユーリが自分で設計した物のため、設計図はユーリの手元にしかありません」

い、一から設計したのか!?!?!ん?

「奥に見えるのは？」

「あ、はい。あちらにあるのは人型艦載機の「ザクウォーリア」です。あの機体は戦場に応じて武装を取り替えることができるようになっていて、あらゆる状況で対応できます」

ま、また見たことの無い機体……こ、コレもなのか？

「これも、艦長のオリジナルか？」

「あゝ、いやこっちはちょっと事情がありまして……」

「? どういうことだ？」

説明中………

「……と言っわけだ」

「噂に聞いていたが、ほんとに“迷い人”というものがいたとはな」

この艦に来てからは驚きっぱなしだぞ……

「いまは、艦長が強化装備の設計をしていますが、それでもこのザクは充分に使えます」

「なあ、質問したいんだけどいいかい？」

「?え」と、ガザンさんでいいのでしょうか？」

「ああ、ザクはいいんだけど、その奥にある機体は明らかに違うけど隊長機かい？」

奥に見えるのは、ザクよりもスマートな形をしており、背中にウイングの付いたブースターを装備した青い機体だ。

「あれはさっき言った“迷い人”の傭兵部隊「サーペント・テイル」隊長の専用機「ブルーフレーム」です。こっちは量産に向いていないカスタム機なので一体しかありませんが」

「・・・聞くけど、エースや、隊長クラスには何か特権とかあるのかい？」

「自分の要望を言ってくれば、カスタム機や専用機を用意できるそうです。もちろんそれなりの実力があればですが」

「・・・わざわざ雇われたにすぎん俺たちに専用機とはな。まあ、しばらくはこの艦に世話になるとしようか。」

「???」「チエルシー、募集の具合はどうだった？」

「あ、ユーリ！調度、大体の説明を終えたところ」

彼がユーリか・・・若いな・・・

「どうも、艦長のユーリです。今回は俺の艦に来てくれてありがとうございます。どうぞいます。・・・早速ですが皆さんに頼みたいことが・・・」

ホントに早速だな・・・はてさて、どんなお願いやら・・・

Side:ユーリ

新たな人員も加えて一週間後、俺たちは軍の基地に来ていた。警備員にオムス中佐の名前を伝えると、すぐに一室に連れて行かれた。

「よく来てくれたね、ユーリ君・・・（多少来るのが遅かったが）。

改めて自己紹介しよう。エルメツァ連邦中央政府軍、第4方面第122艦隊所属、オムス・ウエル中佐だ」

「OGドッグ、戦艦ヒューベリオン艦長のユーリです」

「しかし・・・声から想像してたよりも若いな。まさか君のような少年が艦長とは・・・しかもヒューベリオンといえばまさか・・・」

「ご想像の通りかと・・・意外でしたか？」

結局、この後色々質問を受け、海賊狩りをしていたということ協力を頼まれて惑星“ルード”にいる海賊団に潜入したスパイから、このあたりのスカーバレルの幹部“バルフォス”の本拠地についての、これまでの調査結果を受け取ることになった。

「なんで、簡単に受けちゃったんだい？あのオムス中佐、かなりの野心家のようにだったけど」

質問をしてきたのはトスカさんだ。理由？そりゃあ・・・

「俺も海賊団を潰そうと思っているのが一番ですかね。毎回、毎回あの時のように奇襲をくらっちゃ、めんどくさいったらありゃしない。それに・・・」

「それに？」

「下手に政府を敵に回したら、海賊以上に手を焼きますからね。あの中佐、たぶん想像以上のやり手ですよ」

・
・
・
・
・

そんなわけで、今は惑星ルードの御馴染みとなった酒場にて例のスパイを探しているのだが・・・

「ひそひそ（あの人かな？ほらあの右端の席に座って酒を飲んでる・・・）」

「ひそひそ（多分そうじゃないかい？中佐から聞いた特徴も合っているようだし）」

「だけど、いくらなんでも軍服そのままって・・・まあ、実際スカーバレルに入る奴には軍人崩れもいるらしいけど・・・」

「兄さん？・・・ザッカス兄さん!？」

「って!?!テイータ!?!行き成りなになって、そういえば軍に入った兄を探しているって言ってたけど、ちょっと!?!」

「ひそひそ（ちょっとテイータ、こっちに来て）」

「え?ちよ、ちょっと離してよ!あそこに兄さんが!」

「ひそひそ（さっき話したよな、スパイと連絡を取るって）」

「・・・あ」

「ひそひそ（つまりザッカスさんは、今は潜入任務の最中ってわけ。そんな中に自由に連絡をしたら自分はもちろん、相手だって巻き添えをくらう。だから今回は我慢してくれ）」

「・・・分かった」

まあ、頭じゃ分かっててもホントは本人と話したいんだろうけど今回は我慢してもらおう。

「ちょっと横に失礼します。代わりに“ボトル3本おごります”から」

「・・・お前たちがそうか」

そういつと懐からマイクロチップを渡される。

「これが例の？」

「早くいけ、用は済んだだろう。一人にしておいてくれ」

そういつて、また一人で酒を飲み始める。

「それじゃ、基地に戻るぞ」

「・・・兄さん・・・」

あー、ティータが流石にショック受けているな・・・ここは、

「トローロ、いるか？」

「あ？どうしたユーリ？」

「幼馴染の相談ぐらい受けてやりなよ。流石に、俺はこの状況に対処できない」

「・・・ああ、そうだな。ちょっと様子見てくるぜ」

さてと、基地に戻って作戦会議と行きますか。けど、あのザツカスって人、心ここにあらずって感じがしたような・・・目も虚ろだったように見えたし。

・ ・ ・ ・ ・
「オムス中佐、ザッカスさんから例のデータをもらって来ました」
「おお、これでようやくバルフォスの本拠地が特定できる！助かったよ。それと我々はこのチップの解析が終わり次第、作戦を開始するが君達にも手伝ってもらえるかね？2000m級の戦艦が味方にいればそれだけでも士気の向上に繋がるんだが。もちろん報酬も用意する」

軍のくせに他を頼るなよ・・・まあ、今回はいいけど

「分かりました。こちらにとっても海賊団をどうにかしようと思っ
ていたのです。これは乗組員全員の総意です」

「うむ、それでは解析が終了したら連絡するので待っていてくれ」
実はこっちでも色々とは打ってあるけどね。戦いは正面からだけ
じゃないからね。

さてと、海賊の本拠地に殴りこみと行きますか！！！！

ラッツィオ編 2 (後書き)

ども、久しぶりにGFです。

更新は不定期ですのでご容赦ください。

side:ユーリ

データの解析が終わり、今ここには自分達も含めて今回の作戦に参加する艦の艦長や仕官が集まっている。お、どうやら始まるようだ。

「では、作戦の説明をさせてもらう。スパイからの情報によるとカーバレルの本拠地は、今画面に映し出されている暗礁宙域の奥に位置している。確かにレーダーの効果の半減するこの場所は、アジトにするにはもってこいと言えるだろう。また、目標に行くまでの航路は“アンブラ”と“ギャップ”の二つある。“アンブラ”は狭い航路だが敵の部隊は少ないため少数による奇襲攻撃となる。逆に“ギャップ”は広い航路であり、多数の敵艦隊が配置されているので、こちらには陽動部隊としてこの作戦で投入する艦の6割を送る。・・・この作戦にはロウズで旗揚げをして一躍有名となった“大蛇の魔術師”ことユーリ艦長が参加してくれることになった。ちょっと待てい!!!」ん?どうかしたのかねユーリ君?

ほんとに待てい!?!何、その異名は!?!?

「な、なんですかその異名は・・・?」

「知らなかったのかね?あの戦いで生き残った連中は、君の大型艦から“大”、艦載機にあった蛇のパーソナルマークから“蛇”、そして大型艦とはいえ、たった1隻で80隻以上の艦隊を手玉にとった手腕から“魔術師”、それらを合わせて“大蛇の魔術師”と言われているそうだよ」

ま、マジツスカ・・・た、確かに魔術師の異名を持つ人の真似と
かしてみたけど、まさか自分の異名になるとは・・・は、恥ずかし
いorz

「・・・ゴホン、話を戻そう。ここでユーリ君達にはどちらかのル
ートで侵攻してもらいたいのだが、どうするかね？」

「・・・なら、自分達は“ギャップ”ルートで侵攻します。どちら
にせよ、俺たちの艦じゃ狭い航路は向いていませんし、囷としてな
ら大型艦のほうが目だつていいでしょう」

「ふむ。分かった！それでは作戦開始時間は明朝0600！総員、
準備を開始せよ！」

「「「「「了解！！」「」「」」」」

・
・
・
・
・

そして作戦開始となった。エルメツツア艦隊は切り札の戦艦、巡
洋艦の7割を奇襲部隊に配置して、駆逐艦の大半は陽動部隊に配置
した。一応陽動部隊にも戦艦や巡洋艦はいるけどあくまで旗艦や隊
長艦としてで圧倒的に少ない。いいのかな？こんな配置をしたら陽
動だと簡単にはれそうなんだけど・・・
ちなみに自分達は陽動艦隊の副旗艦として配置されている・・・旗
艦よりでかい副旗艦ってどうなのかな。ま、そこは軍人としての意
地があるんだろうけど・・・

「ま、俺たちは俺たちの仕事をしますか」

「だけどユーリ。大丈夫なのかい？」

ん？トスカさん？

「相手は小型とはいえ人工惑星っていう拠点をもっているからねえ。言わば今回の作戦は「城攻め」といつても過言じゃないよ。ロウズの時とは全く状況が違うからね」

「それならご安心を 既に策なら打ってあるよ」

「策？そっいえば艦内の人数が少し少ない気g、「ヴィー！ヴィー！ヴィー！」

「って何事だい！？」

「オスム中佐より緊急連絡！・・・デ、デブリに偽装していた敵のミサイル艦隊の奇襲を受けて混乱中！！切り札の戦艦も2割が撃破されて、巡洋艦にいたっては5割の大損害を受けたこと！！現在はその奇襲艦隊と交戦中！・・・あ！こちらにも艦隊が来ました！12時の方向！正面です！」

こいつは・・・

「どうやら、こちらの作戦は向こうに筒抜けだったようだな・・・もしくはスパイの情報は偽情報だったのか・・・」

「おい、ユーリ！どうすんだよこれ！！！」

「大丈夫だトーロ。側面ならともかく、正面からの打ち合いならこつちにも勝機はある。むしろ問題は・・・」

「・・・軍の部隊かい？」

「司令官のいる奇襲部隊が逆に奇襲を受けたんだ。どうもしないほうが驚くよ、俺は。そして俺たちのすることは・・・」

「敵艦隊、突撃を開始！第一陣の数は10隻！！」

「士気を立て直して反撃に移ることだ！！バーストリミッター解除、主砲正射3連！敵艦隊の出鼻をくじくぞ！トーロ！！」

「お、おう！・・・ターゲットロック完了！！！」

「撃てー！！！」

ぜ！軍の連中さえいなくなればこの宙域は完全に俺様たちのものだぜ！！精々長くいたぶってやれ！！」

この時までにはバルフォスを含むスカーバレル海賊団は自分たちの勝利を確信していた。そう、この瞬間までは。

「ん？バルフォス様、アジトとの連絡がうまく繋がりません」

「なに？通信装置の故障か？」

「そういうわけではなさそうなのですが・・・え？！ア、アジトから迎撃用ミサイルの発射を確認！？」

「なに！他にも奇襲部隊がいたのか！？」

となると、戦力を割らねばならないではないか！そうすると今後の作戦が・・・

「・・・ち、違います！！ミサイルの目標は本艦隊！！！！」

「な！？！？！？」

ズン！ズウン！！ドゴン！ドガン！ズドン！ドゴーン！ガン！

「ぬおう！？な、なにをしておるのだ！こっちは味方だぞ！！」

「あ、アジトとの通信直りました」すぐに繋げ！！」「りよ、了解！」

いったいどうゆうことだ！！！！

「貴様ら、いったいどうゆうつもりだ！味方を撃つとは！まさか貴様ら、うらぎるつもりか」残念だが、これは裏切りではない』・・・なに？」

画面に映るのはオレンジ色のレンズのサングラスをつけた男。あ

れ？こんなやついたか???

『アジトは俺たち傭兵部隊“サーペントテイル”と“トランプ隊”が制圧させてもらった』

「……何

!!!!!!!!!!!!!!」

・
・
・
少し時間をさかのぼってアジト内部、艦製造ドッグ

「外の様子はどうだった？」

「ああ、それならさつき後退してきた奴に聞いたら例の奇襲は成功して、おおむねバルフォス様の作戦通りだよ」

「おお！これで、これからも甘い汁が吸えるってもんだぜ」

調度その時に資源運搬用のコンテナが運ばれてくる

「ん？資源のコンテナか……最近多いよな船を作るの」

「ああ、例のデカブツのせいで何隻も沈められたり奪われたりしているらしい。そのせいで作っても作っても足らないらしいぞ。ただ今回の戦いでそのデカブツいるらしいからな、ついでに倒しちまうんだと」

「へー、そういえばあのデカブツって人型艦載機を持っているって聞いたけど、本当なのか？」

「ああ、戦闘機もだけど見たことのない人型機もいるらしい。えーと、確か特徴は「ガコン」一般機が緑色で一つ目なのが特徴で、「ウィーン」隊長機が青い機体で人間みたいに二つ目。あ、あと背中に大型のウィングを装備しているらしいぞ」

「・・・もしかしてお前の後ろの？」
「ん？」

そうやって振り返ると、資源用のはずのコンテナ郡の中から出てくる今話した特徴を持った人型機の群れ。

「そうそう、こんなのって・・・」

「て、敵s y」

「動くな」

「・・・！！」

何時の間にか周りには銃を持った奴に囲まれていてそのままつかまってしまった。

その後、作業員だろうか？そいつらがコンピュータの端末からハッキングして監視カメラなどが無効にし、人型機はドッグに泊めてある船、全ての機関部を破壊してこのアジトから脱出できなくした。その後は白兵戦で内部を片っ端から制圧していった。

「ど、どうなるの俺たち・・・」

Side:ユーリ

「エルメッツア軍、駆逐艦3、4、19番艦撃沈！左翼に穴が！！」

「ワルキューレ1番機から20番機を援護に向かわせる！残りは遊撃！！」

「ワルキューレ23、34番機まで撃破されました！今度は右翼に敵戦力が集中！」

「ミサイル発射口開口！弾頭、1から5は多弾頭、残りは対艦で装

填！準備できしだいポイント12 31に発射！！」

「・・・準備完了！発射！！」

「！正面より攻撃・・・来ます！！」

「トスカさん！取り舵20！！回避！！」

「あいよ、まかせな！！」

・・・予想より長いな、まだか・・・

「ん？どうしたんだい？海賊の奴らの陣形に乱れが生じた？」

「いや、それだけじゃねえ。わずかだけど逃げていく船までいるぞ！？どういうことだ？？？」

まっつたぜ！！！！

「おし！“サーペントテイル”と“トランプ隊”がうまくいったよ
うだ！！」

「え、ユーリ！ま、まさか策って・・・」

「多分トスカさんの想像のとおりだぜ！例のカリオの乗っ取られた会社。そこから海賊たちは資金や資源を調達していた。だから、その輸送船の行き着く先はおのずと海賊達のアジトとなる。傭兵部隊にはあらかじめその輸送船を強襲してもらって、その船員と入れ替わってもらい、コンテナの中身はMSに替えさせてもらった！！あとは中に入ればこっちのもの、内部から切り崩させてもらったわけよ！！」

「・・・どおりでカザハナしかいないし、MSも出さない訳だい」

「流石に私はまだお母さん達みたいに潜入工作はできないので・・・あ！ガイ達から通信来ています。モニターに出します」

ウン

『今の通信を聞いたな！流石は“大蛇の魔術師”というべきか！！
残りの海賊を殲滅するぞ！！』

『『『『『了解！！！！！！』』』』』』

その後の戦闘は完全に流れに乗ったエルメツア艦隊に、拠点を失って士気が低下した海賊が勝てる訳もなく、殲滅されていった。ただし、バルフォスの奴は少数の隊長クラスと一緒に部下を囚にして逃げ出したらしく捕まえることが出来なかった。

「とりあえずはひと段落かな？」

ラッツィオ編 3 (後書き)

なにか船のアイデアがあればよろしくお願いします。

旗艦とザクの改造計画はあるのでそれ以外でおねがいします。

ラッツイオ編 4

Side:ユーリ

『では、ユーリ君行くところかね?』
「分かりました」

今俺は、奇襲攻撃をくらいつつも、何とか無事に済んだオムス中佐達と一緒にアジトで鹵獲した“オル・ドーナ級巡洋艦”に乗ってラッツイオ軍基地に帰還していた。

ん?なんで“ヒューベリオン”じゃないかって?それについては後で分かるよ。ちなみに鹵獲した船は“オル・ドーナ級巡洋艦”3隻、“ゲル・ドーナ級ミサイル巡洋艦”2隻、駆逐艦は“ガラーナ級”と“ゼラーナ級”それぞれ7隻と合計19隻で一気にかなりの陣営となった。今までの戦闘で鹵獲してきた船は、こっちに使われるのを防ぐために、奪取される直前に重要な部分メインコンピュータなどを破壊されてしまうけど、今回は事態が発覚する前に制圧したから機関部を除けば無傷なのが多くて、一部のパーツ交換で再利用できた。

最初は鹵獲した船は軍が没収するのかと思っただが、その場合処理のためにかなりの手間がかかるそうなので、アジトの内部で見つけた資金などと交換で貰い受けることになった・・・すごい笑顔だったな、この提案した時・・・まあ、OGドッグにとっちゃあ、あのアジト自体もお宝だけどね(ニヤリ)

・移動中

というわけで、今俺は中佐の部屋に呼ばれ来ている。

「おお、来たかねユーリ君！」

「中佐のほうも見たところ怪我はないようですね」

「かろうじてだがな・・・ああ、君に教えることがあったね。まずはザッカス中尉の件だが、回復には少し時間がかかるようだ。割と他のスパイ隊員に比べたら、泳がすためだったのか軽くてね、簡単な会話ぐらいなら大丈夫だそうだ。・・・だが、SERVOSは元々大マゼランにで作られた物なため、我々には有効な治療法がわからないのだ。」

ここで、一言説明すると、このあたりの銀河は“大マゼラン”と“小マゼラン”の二つの銀河が中心となっており、俺たちが今いるのは小マゼランのまた辺境に位置している。

「そんな・・・それじゃ兄さんは・・・っ」

「安心したまえ。軍も医療機関で全力を尽くさせてもらう。そのために本国への移送手続きもしておいたよ」

「・・・」

「テイータ、あとで会ってきなよ。こつちのことはアタシ達が片付けておくからさ。久しぶりに会った兄貴に文句の一言でも言っけな」

「・・・はい、ありがとうございます」

うーん、やっぱりこういう時トスカさんは頼りになるな・・・なんとというか姉御肌？・・・そのまんまか・・・

「さて・・・とにかく君達のおかげでバルフォスの勢力を壊滅させることができた。本当に礼を言う。こんなものでよければ受け取っ

てもらえないだろうか？」

「・・・これは？」

もらったのは艦の設計図と思われるデータチップ

「エルメツツア軍の駆逐艦と巡洋艦の設計図だ。流石に戦艦は無理だったがこのくらいはさせてもらいたい。それと、君達を本国の軍司令部に招待したいと思う」

「軍司令部・・・？」

「なんだか、つまらなそうなとこだねえ」

「そういわないでくれたまえ・・・本来ならば礼金も出したいのだが・・・なにぶん先の戦闘で奇襲部隊の被害が大きすぎてこの基地からは出せないのだよ。何せ終わってみれば奇襲艦隊は、戦艦は4割が撃沈、巡洋艦は7割、駆逐艦にいたってはほぼ全滅と本来ならば壊滅といってもいい被害だからね・・・」

「それは・・・ご愁傷様です」

ほんとにシャレにならん被害だな・・・

「結局、色々調べてみたところ偽情報のほかに内通者もいたために、完全に手玉に取られていたわけだよ。しかもその内通者も何時の間にか逃げ出しているし・・・ほんと君たちがいなければ今頃ダークマターになっていたとことだよ。時間があれば“エルメツツア中央宙域”の惑星“ツイーズロンド”に寄ってくれ。その時には歓迎させてもらうよ」

中佐の部屋を出た俺たちはザックス中尉の様子を見に行き、テイタはその時に物凄い勢いで泣いた。もちろんその後はお邪魔は退散して兄妹水入らずの会話となっていたが。

その後は、軍の基地で預けておいた輸送艦隊も引き連れて一度、

カリオの乗っ取られていた会社のある惑星“フィオン”に向かった。

Side：カリオ

「また、こうして会社にもどってこられるとは……」

まるで夢のようだ、だがこれは現実。嘘偽りのない現実なのだ

「おお、カリオ坊ちゃん。よくぞ戻られました！」

聞き覚えのあるほうを向くと、昔から一緒に働いた社員たちがいる。

「ああ。この人たちのおかげでバルフォスたちを追い出すことができたんだ」

「おお、それはそれは。おかげで我が社も海賊の手下どもを追い出すことができました。坊ちゃんも会社に戻ってくださるのでしょうか？」

「いや、僕はもう少しこの人たちと一緒に世の中を見て回りたい。まだまだ、学ぶことがあると実感したよ」

これは本当のことだ。例えばMS。人型艦載機は大マゼランでも一部しかないのにこの船には今では当たり前のようにあるのだ。聞いたところ、デットゲートの暴走による異世界の迷い人達からの技術らしいけど、それをこつちの技術で改修して全く問題がない様にしているだけでも賞賛に値する。

「それは……左様ですか……ではその間、我らが力を合わせて

社を守って参ります！」

良かった。どうやら納得してもらえたようだ。

「話は済みましたか？」

「あ、艦長。はい、ちょうど今」

「それでしたら、ここにあるリストの物をすぐに用意できますか？」

”例の奴”のために必要なので

「これでしたら・・・大丈夫です。すぐに用意します！みんな来てくれ！恩人からの頼み事だぞ！」

「・・・分かりました社長！」「・・・」

さてと、色々と学ばせてもらおうとするか。

Side:ユーリ

カリオの用事と、輸送品の搬入、そしてある用件が必要となってくるパーツや精密機械。それらを乗せて、俺達はバルフォスの元アジトのある宙域に戻った。

「こちらユーリだ。必要な物をもって帰ってきたから2番ハッチを開けてくれ」

『こちらトール口だ。補給お疲れさん艦長。だけど、”2番ハッチは外見だけ”になっているから、回り込んで1番ハッチから入ってくれ』

「こちらユーリ了解。・・・使いまくれと言ったがどれだけ使ったんだ？」

上の会話が意味が分からない？まあ、簡単に言つと・・・アジト自体を使って船を作っているのだ！OGドッグにとつてはこのアジトだって立派な船の材料となる！トール口達居残り組みには俺達が外に出ている間にこのアジトを材料に船の造船と・・・

「艦長、今連絡がありました。ヒューベリオン級改修戦艦“ヨルムンガンド”完成度71%だそうです」

そう！ヒューベリオンの改修をしているのだ！この間の奇襲（ラツツイオ編 1を参照）で、側面の攻撃に弱いという弱点を直すために大改修をしているのだ！

この“ヨルムンガンド”は基本形態こそはヒューベリオンのままだが、艦載機と武装面を改造した。

まずは艦載機の発着口として艦艇部の発着口を破棄して、両舷後方にハッチつきのMS用カタパルトデッキを備え付けた。これはガイ達からもらったデータにあった“戦艦ミネルバ”のMSカタパルトを参考にさせてもらった。流石に写真などの簡単なデータのみだったが、参考があるのとないとでは全く違って予想よりも早く設計図を完成させることができた。さらに、両舷前方にはそれぞれ10箇所づつ計20機のワルキューレ用格納庫を備え付けた。もちろんMS用のカタパルトと発進軸がぶつからない様に配置している。ちなみに、ワルキューレのほうは滑り降りるように発進する。さらに追記するとMSの搭載量は40機である。

次に、武装面では、元々両舷に備え付けていたミサイルを、上下に移し変えた。これは側面のままだと艦載機の発着の影響で射線が取れない場合があるからである。追加武装として、先ほど言った両舷後方のカタパルトハッチの上下と側面に、これもガイ達からもらったデータにあった“戦艦アークエンジェル”に装備されている“ゴッドフリート”を採用させてもらった。ゴットフリートは砲塔を回転できるように柔軟な対応ができるが採用した理由だ。これらを

一面に付き3機、正面に打つ際に射線がお互いの砲塔にぶつからぬよう斜めに配置し計18機、砲塔は二連装なので計36門の大火力となった。

「おい、艦長！」

ん？

「あ、ガンドルさん・・・とガンドルファミリーの皆さん」

「頼んでおいたパーツあったか？あれがあると無しじゃかなり効率が違うんだが」

「」「」「」「」「」

頼れるうちの機関士ガンドルファミリーだった。

「だけど、このパーツならもっといいタイプがありましたけど？」

「ああ、そういえば艦長はもと整備士だったか？それはな、正確にはこのパーツの（カチャカチャ・・・）よっと、この部分が大事だな。新しいタイプのだと無いんだよ」

「」「」「」「」

「え？この部分？でもどうやって・・・？」

「それはなこれを、こうやって、ああやって・・・」

「」「」「」「」「」「」

と、何時の間にか整備アンド機関談義になってしまっていた・・・

・
・
・
・
・

しばらくしてガンドルフファミリーとの談義を終えて、今はチエルシーと一緒に医務室のレンカさんの様子を見に来た。

「レンカさ〜ん。調子はどうですか？」

「あら艦長さんに妹さん。怪我でもしたの？」

「いや、艦の改修中なんでついでにみんなの様子を見に行くってユーリが」

「あら残念。せつかくの新薬を試せると思ったのに……」

「……大丈夫なんですか？その薬？」

「あれ？ユーリにチエルシーか？おまえらもなんか貰いに来たのか？」

振り向くといいたのはトーロ。

「ん？いや違うけど……トーロこそどうした？」

「ああ、ちよつと疲れたのか体だるくてな……栄養剤でも無いかと思ってきたんだけど」

「あら、ちよつと栄誉ドリンクの中身用に作った新薬があるけど飲む？試作品だからお金はいいよ」

どうでもいいけどレンカさん「あら」が多いな。口癖か？……それと、なんかとてつもなくいやな予感

「ラッキー じゃ遠慮なく……（ゴクゴクゴク）」

「だ、大丈夫トーロ？」

「ん、プハー、ちよつと苦いけど良薬口に苦しって……」

「……ん、どした？」

「……」

バターン！

「のおう！？物凄い勢いで倒れたぞ！？！？しっかりしろ！！！」

「あら～おかしいわね？？？・・・あ、間違えて“トリカブト”が入ってる」

「って！それ毒草ですよ！！なんでここにあるの！？！？」

「あら、失礼ね艦長。毒草だってちゃんとすれば薬になるし、薬だつて下手をすれば毒になるのよ」

「そういうことはトーロを治療してから言ってください！レンカさん！！！」

なお、この後トーロは派手に罵られることになったが何とか一命を取り留めた。だが、この日以来重度の医者嫌いになって精神面の治療にまた何ヶ月もかかった。

・
・
・
・
・

最後は、リンツさんだ。あらゆる意味で常識人ってイメージがあるけど、どうなんだろうか？割り当てていた部屋にはいると・・・

「失礼しまーって、どわあ！？なんじゃこの本の山は！！！」

「うわーこんなにかくさんの紙の本初めて」

部屋にはいれば本の山！山！山！今では電子本が当たり前なのに、ここにはそれを無視するがごとく昔ながらな紙の本が山のようになっている！

「あー、これはいわゆる“本の虫”言うやつなのか・・・と」
リンツさんは？留守か？」

「・・・で・・・す」

「ん？」

「・・・で・・・」

「なに？」

「こゝこゝで・・・す」

「え？まさか・・・埋もれとる（てる）～～～！！！！」

・

・

・

・

・

「ふう、助かりました艦長」

「本で埋もれる人をはじめて見たよ・・・」

「冗談抜きで埋もれているからびっくりしたよマジで・・・」

「で、どうしてこうなつたんですか・・・」

「いやー、急に読みたくなつた本を探したら、山の一番下になつてまして、横着して引き抜いたら・・・」

「一気に崩れた。というわけか・・・」

「ちなみにいうと、その影響で周りの山まで崩れてさらに生き埋めに・・・」

「はあ～～～～で、結局読みたかつたのって何？」

「良くぞ聞いてくれました艦長！これです！！！！」

「・・・こ、これは！！！！」

「流石は艦長！この魅力に気付きましたか！」

「あーリンツさん、このジャンルの本まだ他にもありますか！」

「ええチエルシーさん、例えば・・・」

その後、今度は小説談義になってしまった・・・

・
・
・
・
そして・・・

「艦長、全艦発進準備OKです」

「MS、およびワルキューレにも問題無しよ」

「よし！いくぞ“ヨルムンガンド” 出航！！」

その合図と共にハッチが開き何隻もの艦と一緒にその巨体が星の海へと踊り出す。

ちなみに、艦数は最終的に“オル・ドローネ級巡洋艦” 6隻、“ゲル・ドローネ級ミサイル巡洋艦” 4隻、“ガラーナ級駆逐艦” 10隻、“ゼラーナ級駆逐艦” 8隻。さらに、前からある“アルク級改良輸送艦” も数を増やして10隻となり、ヨルムンガンドと合わせて、計39隻の艦隊となった。

陣形はヨルムンガントを旗艦として、その後ろに輸送艦隊、それを囲むようにしてゼラーナ、ガラーナと駆逐艦隊が護衛している。ちなみにゼラーナには6機のみだが艦載機が搭載可能で、ワルキューレとザクをそれぞれ3機ずつ乗せている。さらにヨルムンガントの横にゲル・ドローネ級を配置して、最後にオル・ドローネ級をその外円部に配置して早期警戒している。

「みんなに連絡する！俺達は今や単艦ではなく艦隊となった。ゆえにこれよりは俺達は“ヨルムンガンド旅団” と乗ることにした！なぜ艦隊ではなく“旅団” にしたかというと、世界を回ることを目

的と俺達にはこれ以上に無く合うと思ったからだ。“ヨルムンガン
ド”に関しては言うまでもなくこの艦の名前からだ！異議は有るか
！：！！」

「「「「「『『『『『『』』』』』』』無し！：！！！！！！！！！！」

「さあ行くぞ！新たなる星の海に！！！！」

「・・・トテトテテ」

「ん？誰かいたような？？？・・・はて？？？」

エルメツツア中央編 1 (前書き)

大変お待たせしました！
どうぞー！！

エルメッツァ中央編 1

Side:ユーリ

「ハアー、ハアー、ハアー・・・スウ・・・」

辺り一面はデブリで、どこから攻撃か来るのか全く分からない・
・武装に関しては、腰にあった目くらまし用の『閃光手榴弾』もバ
ックパツクの『連装ミサイルランチャー』も使い切ってしまった。
機体のほうも左肩のシールドを肩ごと切り落とされて必然的に内蔵
されていた『ビームトマホーク』も唯一残った武器の『ビーム突撃
銃』の予備弾倉もどこかに行ってしまった。しかも、肝心の突撃銃
の残弾も少ない・・・

「・・・どこから来る・・・どこか・・・」

・・・フツ！

「右！？いや違う！！・・・後ろ！それも天井方向！」

機体の右に現れたのはその辺にあるデブリ。ここまでは良いのだが
・
・

「獲った！！・・・いや違う！あれは俺の機体の腕！？！？」

振り返って撃ち落したものの、それは切断された自分の機体の腕。
そして・・・

『最初の反応は良かったが詰めが甘い』

術を持つメンバーでシミュレーションをしていた。ちなみに俺が艦載機の操縦技術があるのは、まだ『ロウズ』にいたころ、工場で働いていたらどうしても機材の運搬やらなんやらで作業用の機体の操縦を習得しないとならなくて、完璧じゃなかったけどそれが戦闘用の機体の操縦に一部流用できたのが理由だ。まだところどころ不安なところもあるけど…

「艦長も経験が少ない割にはやりますな。といっても素人からやっとなげ出したくらい…いくなれば『若輩』と言ったところですか？」

「う…さすが現役の傭兵のププロネンさん。辛口のコメントありがとうございます」

「ははは、ユーリもまだまだだな…！」

「…ちなみにトーロ君はそれより下の『駆け出し』と言ったところですか？」

「ガビーン……………」

ふっ、調子に乗った罰だなトーロ。

それにしてもガイは強い。公平にするために装備はともかくとして機体は『ザクウオーリア』で勝負でハンデとしてガイ機はバックパック無しだったのに、シミュレーションの開始と同時にデブリに誘い込まれて滅多打ち。とどめは最初の通りだ。

『艦長、もうすぐエルメツツア首都惑星“ツイーズロンド”に到着します』

『いつまでも遊んでないで、さっさと戻ってきなユーリ』

おっと、何時の間にか目的地まで来ていたか…でもトスカさん、別に遊んじやないのに、これも立派な訓練です！

「ツイーズロンド 仕官宿舎」

俺達は今、オムス中尉に言われたとおりにツイーズロンドの軍の仕官宿舎に呼ばれて来ている。

「待っていたよユーリ君（今回は長時間待たされなくて良かった・・
・）！さあ、座ってくれたまえ」

なんだか、ホツとしたような感じがしたんだが気のせいかな？

「まずは前回の正式な報酬を渡さなければな。簡単ですまんがこれが報酬だ。確かめてくれ」

そうやって出されたカードをトスカさんが受け取って専用の機械で読み取る。

「へえ・・・！奮発したもんだね、軍が0Gドッグに100000Gも支払うなんて」

「ぶっ！ほ、ほんとにですかトスカさん！？・・・精々3000Gぐらいだと思っていたのに・・・」

「・・・半分以上は私のポケットマネーだ。なにしろ比喻無しで命の恩人だからね・・・ただ」

「ん？」

「差し出がましいのは分かっているのだが、もう一度協力してももらえないだろうか？」

「・・・・・」

なるほど、金額が多いのは次の依頼のための手付金というわけか・

・・けど

「（どうするんだいユーリ？すでに報酬は貰っちゃったよ。このまま断るのはいろいろとマズイよ）」

「（・・・確かに、だけど今回は軍のこともあるようだけど個人的な思いが大きいみたいですよ）」

「（どうしてだい？）」

「（前回と目の色が僅かばかりですが違いますからね・・・訳有りですよ）」

前回の対海賊の時は、野心に燃えるような感じ目だったが、今回はそれに懇願の色が混ざって見える。

「（・・・なんと言おうとアタシはユーリの船のクルーだ。艦長の言うことはよっぽどのが無い限り断りはしないよ）」

「（ありがとうございます）」

「相談は終わったかね？」

「・・・その依頼、引き受けさせてもらいます」

「・・・ありがとうございます。早速依頼の確認をしたい」

そうやって資料を出してくる。

「まずは、惑星“アルデスタ”“ルッキオ”の惑星間の紛争解決及び海賊の殲滅作戦に協力することだ。この2つの惑星が“ベクサ星域”の資源所有権で紛争になる直前まできている。この紛争をどうにかしてほしい。」

次が、言わずと分かるがスカーバレル海賊についてだ。惑星“ゴツゾ”の先の宇宙海流“メテオストリーム”の先に本拠地があるまでは分かっているのだが、そのメテオストリームをわたっている途中で待ち伏せをされてしまい、討伐しようにもお手上げの状態なの

だ。この攻略を頼みたい。

そして・・・」

「「ま、まだあるの・・・」」

「これで最後だ・・・惑星“ボラーレ”方面から、小マゼラン外銀河に向かったエピタフ調査船の連絡が途絶した。この搜索を頼みたい・・・艦長が私の教え子であり、遠縁にあたる子になる。頼む、この通りだ」

原作にこんなのであったっけ???

S i d e : チェルシー

「……………ジュル」

「!?……………なに、今の!? 例えるなら餌を目の前にした獣が涎を拭う音は!?!」

振り返っても同じ調理場の担当の人以外誰もいない……

「チェルシーさん、どうかしました?」

「いえ、大丈夫です……そういえば最近ユーリが誰かの視線を感じると言ってたけど……まさかこれの事!?!……………(今度から護身にメーザーブラスター持ってこうかな?)」

エルメッツァ中央編 1（後書き）

今回はちょっと短めでした。

最後の艦長と遠縁というのは完全にオリジナルです。
特に気にしないように。

では、また次回！

追伸、2作目を書き始めたのでそちらもお願いします！！

エルメツツア中央編 2

Side:ユーリ

・・・ほんとにこんな状況原作にあつたか???

「頼む！できれば3番目の依頼を最優先で！！」

俺の目の前にはプライドをどっかに放り出して土下座をしているオムス中佐がいる・・・流石にこの展開は予想できなかった・・・

「(・・・なんだか予想外の展開になりましたね)」

「(流石のアタイも、自分が自由なあたし等を使い勝手の良い駒して面倒ごとを押し付けると思っていたけど・・・流石にこれは・・・)」

OGドッグとしてベテランのトスカさんも、この状況に顔が引きつっている。

「・・・と、とにかく3番目の依頼を最優先で、この3つの依頼をすればいいのですね？」

「うむ！幸い、紛争のほうは本国から色々介入しているからしばらくは抑えられる。あくまで延長させるのが本国からは限界なのが悔しいが・・・海賊団のほうも最近はずつと宇宙域の影響か、この所大人しい・・・だが、正直言って調査船のほうは一刻を争う状態なのだ！船員のこともちろんだが、あの船の艦長は私にとって唯一の弟子で、遠縁とはいえ子のいない私に、実際の娘のようにしたってくれた子なんだ！

・・・正直に言うと、調査船の搜索はこの3つの中では軍では1番

優先順位が低い。だが、個人としてはこの任務を最優先でしたい！
・・・だが、それは軍人としてすることはできない・・・」

確かに、大局を見る軍人としてはたった1隻の調査船よりも、海賊対策や紛争解決に力を注ぐのは当たり前だろう。

「そこで！白羽の矢が立ったのが君達と言う訳だ！・・・正直言って使い勝手の良い駒にしているのは分かっている。だが、それも今回で最後だ！報酬も前回の倍、いや3倍は出す！」

・・・まあ、答えはもう出てるけど。

「オムスさん、俺達はもう依頼を了承していますよ。そっちは他の2つ、特に紛争のほうを何とかしておいてください」

「そういうこった。アンタはアタシらの報告を待つときな」

「・・・ありがとう、本当にありがとう」

そう言って、部屋から俺達は退出する。

「・・・トスカさん、貧乏くじ引かせてすみません」

「さっきも言ったろ。アタシはユーリの船のクルーなんだ。艦長の言うことは聞くよ。それよりも帰って他のクルーに言い訳する準備しときな」

「・・・本当にありがとうございます」

「後日、ヨルムンガンド旅団」

「カザハナちゃん、全艦に放送準備」

「はあ、もう突っ込みませんよ・・・準備完了どうぞ」
「ありがとう」

さてと、改めて・・・

『全艦に告ぐ、先日言ったとおりエルメツア軍からの要請で、これより惑星“ボラーレ”方面から小マゼラン外銀河に向かったエピタフ調査船の捜索に出発する。今回は外銀河に出ることになるから、どんなことが起こるか予想がつかない。各員、一層の警戒を取りつつも航海するべし』

『『『『『了解』』』』』

ちなみに、依頼の3件をみんなに話したところ、特に反対も無く了承してくれた。トス力さんからは「信頼されているね」とのこと。うう、ホントみんなには感謝だよ。それでは・・・

『出航!』!』

こうして、ヨルムンガンド旅団は全く航路が決められていない外宇宙に向けて出航した。

・・・その背後からの艦隊に気付いたのは捜索開始から10日目を過ぎてからのことだった。

「10日後、ヨルムンガンド艦橋」

「MS隊、現在の状況を報告してください」

『こちらサーペントテール、こちらには何も無い』

『こちらトランプ隊、ダメです。この辺りは岩のデブリばかりで調

査船の手がかりどころか破片も見つかりません」

「了解、次の搜索ポイントを指定しますのでその辺りを搜索してください」

『了解』

・・・見つからん、軍からの情報で予定コースの通りに来ているのだが、報告どおり手がかりどころか船の破片も見つからん。

「・・・この10日間、見事なまでに空振り続きだな」

「ほんとだよ・・・どうしたもんかね？」

「・・・いつそのこと艦隊もばらして、予定航路外も搜索しますか？今までは安全を考えてまとめて行動していましたが、これじゃあ肝心の調査船がいくら経っても見つかりそうにありません」

「仕方ないね」

と言う訳で艦隊を分散させた。内容はこうだ。

第1部隊：ヨルムンガンド級戦艦を1隻、オルドーネ級巡洋艦を4隻、ゲルドーネ級ミサイル巡洋艦を2隻、ガラーナ級駆逐艦を2隻、ゼラーナ級駆逐艦を4隻、アルク級輸送艦も2隻：合計15隻

第2、3部隊：オルドーネ級巡洋艦を1隻、ガラーナ級を2隻、ゼラーナ級駆逐艦を1隻、アルク級輸送艦も2隻：合計6隻ずつ

第4、5部隊：ゲルドーネ級ミサイル巡洋艦を1隻、ガラーナ級を2隻、ゼラーナ級駆逐艦を1隻、アルク級輸送艦も2隻：合計6隻ずつ

となった。その後は第1部隊を中心に艦隊を分散させて搜索したのだが・・・これがある意味失敗で、ある意味では成功だった。

「分散して翌日」

『こちら第2部隊、今のところ発見報告無し!』

『第4部隊です。調査船は発見できませんでしたがレアメタルの資源小惑星を発見!もったいないので取っときます』

・・・まあ、そう簡単には見つからんよな。それと第4部隊、取るのはいいが、肝心の搜索を忘れるんじゃないぞ・・・

「ふう、そう簡単には無理かな?」【ヴン】艦長!」・・・どうした?」

『こちら第5部隊!搜索中に惑星を確認!無人惑星のようですが、付近にてMSが調査船の破片と思われる人工物を回収しました!』

「見つかったか!・・・だが、破片ということは・・・」

『いえ、確かに破片が見つかりましたが、その後さらに搜索したところ破片の数が少なすぎます。おそらくはこの付近にて漂流しているものかと・・・』

「分かった。他の部隊も聞こえたな!これより、第5部隊のいる宙域に【ドゴオオオオオオン】ぬおおう!?!?」

『『『『!!!』』』』

なんだ?!攻撃!?

「つうう・・・被害報告!!」

「ヨルムンガンド、に対してミサイル攻撃があつた模様!攻撃によりブースター、及び武装に損傷あり!最大速度70%までに低下!左舷ゴットフリート9機の内、5機が装甲の歪み及び損傷で展開不

能です！」

『こちら巡洋艦、及び駆逐艦隊です！攻撃はヨルムンガンドに集中した模様！こちらには被害無し！』

よし、まだ航行機能は死ではないな。だがどのどいつだ！こんな外宇宙に来てまで戦闘をぶつ掛ける奴は！！

「……！6時の方向に艦影を確認！所属は……え！？エ、エルメツツア軍の地方部隊！？」

「何だつて！？なんでエルメツツアから依頼を受けてココまで来たアタイらをそのエルメツツアが攻撃するんだ！？」

あれ？原作にこんなのが規模は小さいけどあったような……

「確認します！……あれ？この地方軍艦隊のIDコード、軍から所属抹消されて要手配になっています！」

「……？つまりはお尋ね者？」

「そうなりますね……？艦長、そのお尋ね者から通信です」

「……………？？？」

艦橋のクルー総員で頭に？を浮かべる。

「と、とにかく繋げてみます」

『【ヴン】ふふふ、この時を、この時を待っていたぞユーリ君！！』

『…』

と、モニターを見ればエルメツツアの軍服を着た男が写るが……

「……………え〜と……あんだ誰？？？」

艦橋クルーはもとより、同時に通信を繋げていた各部隊からも疑問の声が上がった。そして、肝心の・・・もう名無しのゴンベで『私は名無しのゴンベではない』・・・心を読むなよ。

『そんなことよりも、貴様らはほんとに私を忘れたというのか！？この元ラッツィオ軍基地司令、テラー・ムンス大佐を！！！！』

高々に自分の名前を言ってもらって悪いが・・・

「覚えてますかトス力さん？」

「アタイも全然覚えてないね。なまじオムス中佐が目立っていたからね」

「と言うかユーリ、あのオツサン元大佐って言ってたろ？それってオムス中佐よりも階級上ってことなのに指導権持って行かれていたって事だよな・・・あんま指揮能力は高くなさそうだな」

あ、今のトーロの一言で完全に撃沈してorzの体勢になっている。

『うう・・・それもこれも貴様らがスカーバレル海賊団を倒すからだ！そのせいで俺は今じゃこうなっただんだ！！！！』

「・・・一応聞くけど何したの？」

『教えてやろう！俺は海賊と結託して軍の情報を海賊達に流していたんだ！！！！』

「・・・ああ、内通者ってアンタか・・・完全に自業自得だよなそれって」

「「「「うん、うん」「「「「」

クルーのみんなも同意権のようだ。

『うるさい！どちらにせよ、こちらが背後を取っているんだ！お前達はここで沈める！！』【ヴン】』

「あ、通信切れました・・・！後方より艦隊接近中！サウザーン級巡洋艦を先頭にアリアストア級ミサイル駆逐艦がVの字を取って進撃してきます。編成はサウザーン級1、アリアストア級4で1部隊を生成。それが4部隊、合計20隻です！！」

「振り返るな！最大速度で前進！振り切るんだ！！ヨルムンガンドは無事なゴットフリートを展開、牽制射撃！他の艦はザクの武装を遠距離戦用の“ガナー”を装備させ、甲板上に固定して援護砲撃をさせる！敵及びミサイルを近づけさせるな！！！！」

「お、おいユーリ！反転して攻撃しないのか？！！」

「ト一口、お前も分かっているだろう。もう俺達は敵艦の射程内にいるんだ、この状況で艦を旋回させたら敵に横腹を見せることになる。そうなれば俺達はただの的だ！ヨルムンガンドはともかく、他の艦じゃ確実に沈む！！」

「！！わ、分かった！！」

くそ、艦隊を分散させたせいで周辺警戒が疎かになっていた。どうする・・・なんとか振り向いて反撃にうつらないと・・・さてよ？

「第5部隊！聞こえるか！」

『聞こえています！ただちに戻って救援に・・・』

「いや、それよりも例の発見した惑星のデータは？」

『え？なんで「早く！」は、はい！今データを送ります！！』

送られてきたデータに目を通す・・・これならば。

「よし！各員これより作戦を説明する！」

「戦闘開始から翌日」

S i d e : テ ラ ー

「おのれ“大蛇の魔術師”！逃げることにしか能が無いのか!？」

エルメツツア本国から出るのを、今もなお軍の内部にいる内通者に高い金を払って聞き出し、依頼の搜索のためか？分散して数が少なくなつたところを奇襲をかけたまでは良かったが、奴らの牽制射撃で近づいて止めをさすどころかミサイルも届かない！レーザー砲と違ってミサイルにはもちろん残弾があり、それもだいたい使ってしまった。

しかも、向こうは逃げるばかりでこちらとの距離は一向に詰まる気配が無い。

「くそ、このままでは分散した艦隊が戻ってきてこちらが逆にやられるぞ」

「!!!進行方向10時の方向に無人惑星を確認！大きさはエルメツツア本土惑星並にあります!...!魔術師艦隊、その惑星方面に進路変更!」

「なに!？」

オペレーターの言うとおり、10時方向に巨大な無人惑星があり、魔術師の艦隊はその陰に隠れようとしている。

「いかんぞ!このままでは安全に旋回することを許してしまう!」
「か、艦長!ど、どうすれば!？」

だが、考え方を変えれば・・・

「逆に言えば敵からも射程外ということだ！一気に距離を詰める！」

「了解！機関出力最大、最大船速！！」

このまま近距離からミサイル攻撃をしてくれる！

そうして、惑星に近づいていき魔術師艦隊に攻撃を加えようとするのだが・・・

「まもなく、射程及び射角に敵艦隊を捕えます！！」

「よし！ミサイル発射準備【ヴィー！ヴィー！ヴィー！】っ！何事だ！！」

「こ、これは・・・！！敵予想地点に艦隊がいません！代わりに大量の艦載機が接近中！！」

「い、いかん！こちらも艦載機を発艦させる！！」

その命令が出された後、あと少しで艦載機が到着するところでサウザーン級4隻からエルメツア軍が開発した汎用戦闘機“クーベル”が出撃していく。だが・・・

「・・・ダ、ダメです！敵のほうが数も多い上に性能も桁違いです！被害甚大！！」

「それよりも、敵艦隊はどこに行った！奴らさえ叩けば艦載機なだ

【ドゴオオオオオンン！！！！】何！？

いきなりの衝撃に驚いて振り返れば、僚艦のアリアストア級が火を噴きながら沈んでいくのが見える。いや、実際はそれどころではなかった。

『こ、こちらサウザン級2番艦“グラン”！機関部に被弾！し、沈m【ドゴオン】・・・！』

『アリアストア級4番艦です！ミサイル発射口に直撃！被害拡大中！し、指示を、指示をくれ！！！』

『こちらアリアストア級13番艦！こちらの部隊のサウザン級4番艦“アルン”の艦橋に直撃弾！生存者無し！以降、自艦が第4部隊の指揮を取ります！』

『サ、サウザン級3番艦、艦載機部隊です！各部隊のリーダーは自分を除き全滅！残機は各部隊合計で7機しかいません！指示を！・・・て、敵機が、あ、青い蛇が来る！う、うわああああ・・・！！？』

聞こえてくるのは阿鼻叫喚の悲鳴ばかり、その全てが自分の艦隊が壊滅しつつあることを告げるものであった。

「ど、どこだ！どこから攻撃を受けている！！！！？？？」

「か、艦長！攻撃来ます！」

「一体どこからだ！！！」

「じよ、上下からの挟み撃ちです！！！」

Side:ユーリ

「作戦大成功ってか！」

ここまで綺麗に決まるとは思わなかったな。

ちなみに何をしたのかと言うと、惑星の影に隠れると同時に艦載機部隊を出撃させて、敵艦隊の足を止める。その次にその場で反転するのではなく、そのまま二手に分かれつつ、惑星の影に向こうの艦隊からは常に隠れるように移動し、艦載機部隊からの情報を頼りに、敵艦隊の上下から襲う形で惑星の影から出て挟撃したわけだ。

「攻撃しつつ包囲陣形！攻撃の手を緩めるな！」

「敵艦隊被害甚大！サウザーン級2隻の撃沈を確認！アリアストア級も9隻を撃破」

『こちら艦載機部隊だ。敵の艦載機は撃破した。これより対艦攻撃を開始する』

・・・そろそろかな？

「・・・！艦長！敵艦隊移動を開始！強行突破に移る模様です！」
「無理に止めようとするな。わざと道を空けて通すんだ。下手をすると痛い反撃を喰うぞ！よく言うだろ『窮鼠かえって猫をかむ』って」

「・・・だけど、ユーリこのまま逃がすと色々面倒じゃないかい？」

「トスカの姐さんの言うとおりだぜユーリ。ほっとくとまた来るかもしれないぜ？」

ま、手は打ってるけどな

「大丈夫ですよ、トスカさんにトーロ。今頃は・・・」

『こちら第5部隊、救援に間に合った第3部隊と共に残存兵力の拿捕に成功！いまからそちらと合流します』

「・・・ほんと手回しの良いことで」

「いやそれほどでも」

さてと、それじゃ 搜索再開としますか。

「……ん？こいつは……」

「ん？リードさん、何かありましたか？」

そつえば最近リードさん 出番無かったな……

「……惑星の表面に人工物の反応があつて調べたが……ビンゴだ」

と言つことは……

「特殊船、スペランカー級調査船、艦名“アルテミス”……見つけたぞ」

エルメッツァ中央編 2（後書き）

．．感想がほしいです。

ちなみに今回は戦闘を書くのが難しいのを改めて実感した。
戦闘はこんな感じでよろしいでしょうか？
問題点があれば指摘をお願いします。

それではまた次回に。

10月17日 全体を少し修正

エルメツツア中央編 3 (前書き)

今回遅れましたが、びっくりする参入者あり、どうぞ！

エルメツツア中央編 3

Side:ユーリ

「じゃあ、まずは各艦隊の状況を報告してくれ」

いきなりだが、今俺たちは色んなことが一度に起こってしまったので一度まとめるために、モニター越しだが各部隊のリーダーとヨルムンガンド艦橋メンバーで会議中である。

『第2艦隊です。こちらは特に何も無く報告するようなことはありませんでした』

『第3艦隊です。先ほど第5艦隊の報告どおり共同で逃亡した敵艦隊の鹵獲に成功。敵の士気はかなり低く制圧も楽に出来ました。被害も制圧の際に軽傷者が数人出た程度です』

『第4艦隊です！戦闘には間に合いませんでしたが、その分報告したように小惑星からタツプリとレアメタルの採掘に成功！売り払えば5000は硬いです！』

『こちら第5部隊、先の逃亡艦隊との戦闘にて、最後の抵抗が先に攻撃を仕掛けたこちらに攻撃が集中。ガラーナ級2隻が中破し、流れ玉が後方に待機していたアルク級輸送艦1隻に命中、こちらも中破です』

『その代わりに敵艦隊の意識は第5艦隊集中した。おかげでこっちはさっき言った様に楽に制圧できました。ちなみに鹵獲したのは旗艦だった“サウザーン級巡洋艦”1隻と“アリアストア級ミサイル駆逐艦”が4隻。残りのサウザーン級1隻とアリアストア級3隻は被弾が激しく轟沈しました』

流石に被害が出たか・・・本体の第1艦隊もヨルムンガンドに被

害があるし、オルドーネ級とゲルドーネ級がそれぞれ1隻が被弾して小破。ゼラーナ級は無事だったが、ガラーナ級は3隻が被弾して、しかも2隻が大破して危険な状態である。

轟沈した艦こそいなかっただが何隻かは危険な状態だな。

「・・・とりあえず、第3、第5艦隊はヨルムンガンドを除いた損傷した艦と第4艦隊の見つけたレアメタルを満載したアルク級と共に一度エルメツアに帰還。艦艇の修理作業を頼む」

『了解』

「第4艦隊は・・・さっき言っていたレアメタルのことだが、まだあつたか？」

『はい。まだアルク級ならば何隻か分なら積めるほど大量にあります！』

「ならば、残りのアルク級のうち5隻と一緒に残りのレアメタルの採掘をしてくれ。それが終了した後、同じくエルメツアに帰還だ」
『承知しました！』

さてと後は・・・

『自分たち第2艦隊は？』

「それなんだが、先ほど今すぐ近くにいた無人惑星から人工物の反応が先ほど確認できた。リードさんが調べた結果“スペランカー級調査船、艦名アルテミス”で間違いないようだ。探索の間、第2艦隊は惑星軌道上で待機。もう無いとは思いが、さっきのようにスカーバレルが来るかもしれないから注意してくれ」
『分かりました』

ちなみに、なぜ直接アルテミスのところ而降りて救助しないのかというと、この惑星の大陸はものすごい密度の森林になっており、海岸線などの一部にしか着陸できる場所が無い。アルテミスが落ち

たのはそんな密林のご真ん中なのである。

下手に森に降下ポッドで降りてしまつと降りるのはともかくとして
上がる際には木が邪魔をして精確に飛び立つことが出来ず途中で落
ちてしまうかもしれない。

また艦を直接降ろそうとすれば、確実に姿勢制御のブースターで
火事が起こる。自然に良くないも理由だが、下手にアルテミスの乗
員が巻き込まれたら本末転倒である。

「これより、第1艦隊のヨルムンガンドと無事な艦は惑星に降下、
搜索を開始する！総員！気を引き締める！！」

『『『『『了解！』『』『』『』』』』』』』

「搜索開始2日目」

Side：トーロ

惑星に降りた後、俺たちはいくつかのグループに分かれて搜索を
始めた。

艦内にはカザハナやロレッタの姉さんが待機してくれている。彼
女らからの通信で俺たちをアルテミスまで誘導してもらつってわけ
だ。

・・・ところでこれどうにかならないかな。

「あら、また希少価値の高い薬草を見つけたわ！ここはもう医者や
科学者にとっては楽園だわ！」

「レンカさん！薬草集めはせめてアルテミスの救助を終えてからお
ねがいします！……！」

「あ～～れ～～せめてあの花だけでも！」

「あの花つて、まわりで虫や小動物や死にまくって明らかに危ないじゃないですか!!!」

レンカの姉さんがそこ等じゅうの薬草（毒草）に目を光らせて飛んでいき採取しようとするのをティータが止める。ちなみにツッコミを入れているのはリンツだ。ちなみに俺を入れたこの4人が1つのチームとなっている。

「もう！いい加減にしてください！アルテミスの乗員が手遅れにならない内に早く行かないといけないのに！」

「あゝごめんなさいね。でもこの惑星の植物つて珍しい上に、図鑑にも載つてないものまであるからつい・・・」

「確かに、どの本にも載っていない植物ばかりですね」

確かに珍しい植物ばかりだが・・・変だな

「ちょっとおかしい気がするな・・・」

「・・・？どうしたのトーロ、難しい顔して？」

「今思えばこの惑星つて、惑星ボラーレから約10日、しかも俺たちは搜索のために少し遅めに航海していたんだから、実際にはもっと早く到着していてもおかしくない距離だ。それなのに開拓の手が及んでいない・・・どういうこった？」

大気中の成分は問題なく、そのまま外に出ても問題は無い。生き物に関しても普通にいて問題ない。実際に、少し前に仕留めたイノシシに似た生物も問題なくいまでは腹の中だ。

「そう言われれば、確かにそうですね・・・」

「・・・一応、カザハナ達に連絡して調べてもらおうか」

Side:ロレッタ

「はい・・・はい、分かりました。すぐに確かめてみます」

「どうしたの？」

「あ、お母さん。今トーロ達から連絡があっただけど・・・」

~~~~説明中~~~~

「だって。気にならない？」

「確かにね。調べてみる価値はありそうね」

そう言った後、自分のオペレーター用のシートに座り検索を始めてみる。

「まずは航海記録からね・・・」

航海記録から目ぼしいのを探し出しさらに詳細を確かめていく。幸いオムス中佐から搜索に使ったためにここしばらくの航海記録や簡易な航路図も貰ってきている。この惑星の調査記録もあって可笑しくないはず・・・

「1時間後」

「・・・これも違う・・・これも・・・こっちも・・・」

「お母さん、そっちは？こっちの分にそれらしいデータはないよ」

「どうやら娘の担当した分にはほしい情報はなかったようだ。ん？」

「これは？・・・あったわ、どうやらこの記録みたいね」

「そうやってお互い見れるようにモニターに出す。」

「えーと『第1次未開惑星搜索隊レポート』」

「記録にある惑星の座標はピッタリね。まず間違いないわ」

「そうやって調べてみるのだが、内容は現地で発見した新種の植物や生物、大気状態の報告で、特に気になるものはなかったのだが・・・」

「次が最後のページだね」

「・・・え？これは」

そこに記録されていた文章は。

『 月 日 本日も未明、調査隊20名が負傷した状態で帰還した。死傷者こそいなかったものの全員が精神に異常を起こすほど混乱しており、正確な報告は期待できなかった。』

『 主な傷は裂傷であったが、一部には火傷の跡もありどのような事があったのかは容易にはんだんができない。』

『 以上のことよりこの惑星の開拓は現段階では非常に危険だと判断し、これよりエルメツア本星に帰還する。』

『 なお、帰還した隊員が“虫”という単語、もしくは虫自体に異常に反応するため原生生物に虫の極めて危険生物がいると考えられる』

「・・・急いで連絡を入れないと!!!」

S i d e : ガイ

「・・・分かった。以後そのことを注意して搜索する」  
「カザハナ達何だつて？」

イライジャがカザハナ達からのいきなりの連絡が気になったのか質問をしてくる。ちなみにチームは艦の2人を除くサーペントテールの3人だ。

「軍から貰ったデータをチェックしたところ、この惑星に危険生物がいる可能性があるそうだ」

「うげ！マジかよ！？」  
「特徴は分かっているのか？」

今度はリードが質問してくるが、

「いや、記録にも詳しいことは載っていなかったそうだ。ただ一言“虫”とあるそうだ」

「虫ね・・・毒虫でもいたのか？」

「それならば、20人全員が混乱したことに説明がつかない。それに傷は裂傷、火傷がほとんどだそうだ」

「なら、ますます分からんな・・・あ、酒が切れた」

「リード、それどころじゃないだ」「うわああああああああ  
「！！！！！！！！！！」「っ！！？なんだ！？」

「先行していた機関部班の連中だ！！」

悲鳴が聞こえ急いで駆けつける。特にあんな連絡のあった後だからな。そうしてたどり着いたら・・・

「……助けてくれ……！！！！」

「同胞……！！！！」

「ええい、クソ！ロープが足らん！！」

機関部連中のガンドルを除く4人の内、3人が沼にはまって身動き取れなくなっていた。

「おお、ガイ達か！すまないがロープを貸してくれ！このままじゃあいつらが底なし沼に沈んじゃまう！！」

「……お助け……！！！！」

「みんな動くな……！！余計に沈んじゃまうぞ……！！！！」

「……とりあえず救助開始だ」

「少しして……」

「……あ、危なかったツス……」

「よがっだよがっだよ……」

「ガイ達が気付いてくれなきゃあの3人今頃沼の底だったな」

あの後、なんとか救助して今は何が起こったのか聞いている。取りあえず連絡にあった虫関係ではないようだ。

「いつもは4人組のこいつ等のうち、こいつだけが立ち止まって何かを見ていてな、それで連れて来るために俺が戻ったんだが……」

「……俺達はそのまま進んで、落ち葉やら何やらで見えなくなっていた沼にはまりましたツス……」

「ちなみに俺は、遠くに気になるものが見えたので、立ち止まって

いました」

「気になるもの？」

彼は何を見たのだろうか、と黙っていたら。

「なんだか、“赤いカブトムシ”のようなものが木の隙間から見え  
たもので」

「……かなり気になるな、それは……艦長たちは無事なのだろ  
うか？」

Side：ユーリ

「……了解、気をつけるよ」

それにしても“虫”ね……その調査隊は何と出会ったんだ？取  
りあえずは武装の点検、点検つと。

「ユーリ、カザハナちゃん何だつて？」

「記録を調べていたら、以前ここに来た調査隊が、この惑星には危  
険生物に遭遇したから気をつけるつて」

「危険生物？！どんなのか分かっているのかい？」

「情報が少なくて虫関係としか分からないつて」

「まずいですね……何事も情報が大切なんですが」

ちなみにメンバーは俺、チェルシー、トスカさん、ププロネンさ  
んの4人だ。ちなみにガザンさんには他にトランプ隊のメンバーを  
まとめてもらっている。

「それと、ガイとガンドルの班が“赤いカブトムシ”のような影も見たって連絡があった。もしかするとこいつかもしれないから」「カブトムシ？それで一体何があったんだらうね、その調査隊」「それは分かりませんよ・・・ま、今は・・・」

【バシユン！！ ドサ！】

「飯にするとしますか」

調度上にいた蛇が頭を打ち抜かれて落ちてくる。口を大きく開けているところを見ると何かを食おうとしていたのか？  
ともかく、本日の晩御飯としますか。

《キィ・・・》

この時、俺達は気付かなかった・・・この蛇が何を食おうとしていたのか、そしてそれが何を考えていたか。

「搜索開始4日目」

「ん、朝か・・・」

結局、昨日は特にあの後何もなく、そのまま順に火の番をしつつ夜が明けた。調度、俺が寝ている間に夜が明けたようだ。



なんか、変な虫がいた・・・ってあれ？大きさがこそ少し小さくて、俺の頭より一回り大きい程度だが、緑の体に、触覚の先端の目、それでもって羽がついている。これって・・・

「いや、神様達よ、色々混ざっているって言ってたけど、こいつもありっすか」

《キィ？》

と、虫はどうしたのって感じに首？をかしげるのだが・・・内心  
それどこれではない、なぜなら・・・

「（マクロスFのバジュライーンの幼体ツスか—————  
—————）」

もう、なんでもありが—————い!!!!!!

エルメツツア中央編 3 (後書き)

多少、原作とは変わりますがバジユラ基本そのままです。

では、また次回に。

エルメツツア中央編 4 (前書き)

やっと書けたぜ！

ではどじろ！

## エルメツツア中央編 4

Side:ユーリ

「????」ありがとうございます!一時はほんとにどうなるかと・  
・ほんとにあのままだと、どうなったことかと・・グスッ、グス  
ッ」

「だ、大丈夫ですか?ルチアさん?」

「キィ、キィ」

え?いきなり飛ばすな?ま、そりゃいきなり女性が泣いている場  
面になっただって訳が分からんか・・・こんなことがあったのだ・・・

「バジユラ遭遇時」

「だ、大丈夫なのかい、ユーリ?」

「少なくとも敵意は無いようですが・・・」

「キィ キィ」

いや驚いたなホント・・・あの神様達が色々他の世界が混ざって  
いるっっているのは聞いていたけど・・・人以外でもありかい。

説明するまでもないかもしれんが、今俺の頭の上でなっている  
のは前世で見た、アニメ「マクロスF」に出てくるバジユラという  
生物だ。しかもその中でも、蟻や蜂のように群れの中での頂上に位  
置している女王、その幼生体である。

しかも・・・

「・・・ナデナデ」

「ギイ・・・」

「・・・ナデナデナデナデ」

「ギイ・・・ギイ・・・」

「・・・意外とかわいいかも？」

「チエルシー嬢のほうが意外と思うが（汗）」

その後、この幼生体（面倒なので以降チビ）が呼んだのか、成体サイズの兵隊クラスの位置にいるような全長20mサイズの奴までが数匹来たが・・・興味本位で撫でたチエルシーに懐いたのか敵意は皆無である。チエルシーもなんか気に入っているようだし（その代わりプロネンさんが少し引いていたが）。

それにしても、報告にあった虫ってバジュラのことだったのか・・・確かに赤いし、虫っぽいし、怪我の火傷に関しても、こいつら確かビームみたいなの打てなかったけ？それが原因か？

そういえばよく見ると、成体サイズのほうは原作通りじゃなくてカプトムシそのままなんだよな・・・原作のように二本足で立っているんじゃないかって普通の虫の用に腹ばいの状態である。

「キイ、キイ」

「ん？どうしたチビ？」

どうしたのか頭から降りて肩に乗って来た。どうするのかと思っ  
たら・・・

【カプツ！】

「い・・・っつ！」

「ユ、ユーリ!？」

いきなり首元に噛み付いた!？な、なにするん・・・ん？ほとん

ど痛くない？声を上げたのもいきなりの行動に驚いて反射的に出たようなものである・・・って！

「この！離れな、虫公！！」

「キー、キー！」

「ト、トスカさん！驚いてるのは俺もだから落ち着いて！つか今逆にチビを引つ張られると痛いからって、イデ、イデデデデ！」

トスカさんがチビを俺から離そうとするんだけど、痛くないといえ比喻ではなく食い込んでいるからチビとは別に痛い！

【ポン！】

「おわあ！？【ドゴ！】が！？」

「イタタタタ・・・ト、トスカさん大丈夫ですか？」

「こ、腰におもいつきり岩が・・・そ、それよりもユーリ大丈夫かい！？」

いきなりチビが離すもんだから、トスカさん、勢いを殺せずにかけた上に、調度後ろにあった岩に腰を強打したようだ。

でも、そんなことよりも・・・

「それよりもチビ・・・おまえいきなり何すんだよ！？」

<ゴメン デモ コウシナイ ト ハナシ ツタワラナイ>

「・・・ん？今誰か喋った？」

「あん？アタイじゃないよ？」

「私でもありませんな」

「私も違う・・・あれ？ユーリ、噛まれた所になにかあるよ？」

「ん？」

ん？噛まれた所？・・・なんか石っぽいのが埋め込まれている？

「トスカさん、自分じゃ見えないんですけど・・・噛まれた首筋に石っぽいのがありません？」

「どれどれ・・・紫色の石が埋め込まれたようになってるね・・・大丈夫かい？」

「今のところはなんとも・・・」

<ハナシ スンダー ?>

って、また聞こえたぞ！・・・もしかして話しかけているのって

「まさか話してるのって・・・チビか？」

<チビ ? ソレ ボク ナラ アタリ !>

「やっぱりかい！！！！」

「ユーリどうしたんだい！？それにチビって？」

「どうやらこの石、チビ達専用の翻訳機の設定があるようです」

「・・・何 !!!!!!!」

この石って、原作ならばフォールドクォーツって名前の鉱石で、バジユラの体内で精製される物じゃねーか！確かバジユラ達ってこの鉱石で互いに意識下のネットワークを構成していて、これにより意識の統一化をしているかどうとか・・・

まあ、簡単に言えば・・・テレパシーで互いに情報伝達が可能・・・ってところか？

ちなみにだが、後で聞いたら異種族に対する親愛の証でもあるらしい。

「まあ、何と云うか・・・それよりも何でいきなり懐いてきたんだ？」

<タスケテ クレタ>

「助けた？何時？」

<クワシク ハナス ト>

その後説明を受けたのだが・・・どうもチビは最近ようやく飛べるようになって、それで森の中を練習で飛んでいたのだが、途中で兵隊クラスの護衛役と体のサイズのこともあって気付かないうちにはぐれてしまったそうだ（意識下のネットワークはあくまで最低限なので意識したときや、緊急時の時のみだそうだ）。

そんな時に、羽を木に引っ掛けてしまい動きの取れないところで自分が孤立したことに気付いた上に、蛇が来て、危うく食べられかけるところだったんだが、運よく俺達が晩飯にした蛇がそれだったらしくいきのびたそうだ。

それが懐いた理由だそうだ。

「・・・あるんだねえ、そんなことが」

「ま、まあ、世の中ありえないと言う事がありえないとも言いますし」

「うん・・・あれ？」

うん？今度はどうした妹よ？

「どつたの？」

「うん・・・なんだかチビちゃんの仲間の様子が」

<セイチヨウ ハジマッタ>

「成長？」

またここで聞いてみたんだが、こいつらの種族は、この惑星にもともと住んでいたわけじゃなくて、銀河中の惑星を移動し続けてきて、もうそれは数えるのもアホらしいほど繰り返してきた、いわば宇宙生物だそうだ。

移動の目的は『種の進化』多数の生物の情報を取り入れて、成長

を繰り返していくそうだ。ちなみにクイーンクラスが交配なり血を吸ったりなりすればネットワークから全体にいきわたるそうだ。ってそれって・・・

「さつき噛み付いたときにか!？」

<イシ ウメル ツイデ ニチ ヲ スコシ>

「艦長、進化が完了するみたいですよ」

そうやって見てみれば、完全に二足歩行となり、前4本の足は手のように自由になっているバジユラの姿が・・・原作バジユラが完成しちゃったよ、おい。

「アハ、アハハハハハ(汗)」

「笑い事ではない気が・・・【ピーピー】ん?通信?」

母艦から通信?また何かあったの「何!?それは本当か!？」冗談抜きに何があった!?

Side:ガイ

「確かこの当たりだったよな・・・」

「ああ、母艦からのナビゲートが正確ならばこのあたりだが」

あの後には機関部班と共に行動し、報告のあった虫に警戒しながら搜索を再開した。

途中でイライジャと機関部4人組が蚊に喰われて心配になったようだが・・・何もないようなので少なくとも違うみたいだった。まだ油断はできんが・・・

「……ありやした……!!!」

「見つかったか！」

「ガイ、こっちだ！」

林を掻き分けて進むと、完全に大破した船が発見された。破損した跡があちこちに見られる。

「ひどいなこれは……とにかく生存者の救助だ、急げ」

だが……

「おかしい、全員死亡というならばまだ分かるが……」

「ガイ、こっちはだめだ！人っ子一人いない！」

「こちらガンドル、こっちもだ！それなのに非常用の食料は手付かずのままだぜ！どうなってんだ!？」

「……二に同じく……」

「ガイ、こいつはちょっとおかしいぜ。死体はいくつか確認できたがその全てが遺体安置用のカプセルに入られている。なら少なくとも生存者がいるはずだが……」

リードの言うとおりだ。大破したとはいえ船体はまだ形を持っている。全員が宇宙空間に放り出されたとは考えにくい。だが、非常食があるにも関わらずここを離れるのは考えにくい。

「とにかく連絡だ」

Side:ユーリ

「・・・だそうです」

「マジか・・・どうなってんだ」

「死体はちゃんと処理がされていたってことは少なくとも生存者がいるってことだが・・・」

「うーん、チビは知らないだろうし」

<シッテル ヨ>

「トスカさんの言うとおりだよな〜知って・・・るんかい!？」

<シッテル ヨ>

「え?もしかしてユーリ?当たってた?」

「はい!チビ、どこにいるのか知ってるのか!？」

<ミンナ ツカマエタ カラ>

「はい?」

今、なんとおっしやいましたか?

「・・・今なんていった?」

<ミンナ ツカマエタ カラ>

「・・・は?」

どゆこと?

説明してもらったんだが、どうも以前の調査隊はバジユラ達の卵を調査しようとして持ち帰ろうとしてしまったらしい。

当然子供を取られるのだからバジユラ達は激怒。トラウマが残るほどの攻撃を食らったらしい。

そうしてまた同じ服装の連中がやってきたもんだから先手必勝とばかりに攻撃。そのまま捕獲して巢の近くの洞穴に見張りつきで監禁状態だそうだ。

「すまんが、その人たちを探しに来ただけで開放してくれないか

な？」

<・・・ジヨウケン アル>

「条件？」

「条件？・・・ユーリ、ある意味でいやな予感がするんだけど」

奇遇ですねトスカさん。俺も同じことを考えていたところです。

<ナカマ ト イツシヨ ニ ソラ ニ イキタイ !>

と、まあこんな感じにいろいろあったが、無事に生存者とチビ達の仲間を回収して帰還することになった。ちなみにバジユラは群れ全てではない。チビの担当することになった群れの一部と一緒に連れて行くことになった。その話をするときに親クイーンのところに関連して行かれたけど・・・すごい、としか言えなかったな。チビがどのくらい生きてたらああなるんだろ？

「うう、ホントに一命を取り留めたと思ったら、いきなり赤い虫が・・・しかも隔壁を閉じて難を逃れたと思ったら、その隔壁を焼き切ってくるし・・・何なのあの生物はって・・・な、なんでここにいるの!」

「あゝ説明するから、ちよっと落ち着いて・・・」

「キイ、キイ、キイ」

・  
・



たな。もし進化の過程で角が無くなったらどうしよう（笑）

「……ん、まてよ、進化がネットワークを通じて群れ全体に及ぶって話したよな……今俺はその影響のある鉱石が埋め込まれているんだよな……」

「なあチビ？」

<ナニ？>

「進化の影響は全体に及ぶって言ったよな」

<イッター>

「俺には何もないのか？」

<……タブン アル>

「おい!？」

あ、意識したら急に目の前が……

「ちょ!?!? ユーリ!?!」

<ダイジヨウブー?>

「……すいませんトスカさん、ちょっと倒れます」

【ボタン!】

「ユーリ!」

エルメツツア中央編 4 (後書き)

前にも言ったように就職活動でかなり遅れる上に不定期ですがご容赦ください！

ではまた次回に！

## お知らせ

えー、更新を期待してくれた皆様方には申し訳ありませんが、今回は更新無しです。

その代わりに、全体を見直した結果、修正箇所、形式の統一などが、大幅な修正が必要な部位を多数確認されたのでこれを機会に書き直しを行います。

それに伴い、キャラの増加などが見られます。

この3連休中には投稿するので持っていてください。

・・・それと何度もいいますがこの小説をやめることだけはにありません！ありませんったらありません！・・・就活さえ、就活さえ終われば・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3887/>

---

無限航路冒険録

2012年1月6日21時50分発行